

他の動詞について、「に似てゐる」「らしい」などの意味をあらはす接尾語である。

△な……そ  
●さかしがり  
巧ぶり。利

たはぶれにても、かやうに、隔てがましき(隔てのあるらしい)事、なさがしがり聞えさせ給ひそ。(源氏物語)  
人に恥がましき(恥らしい)こと、いひつけたると恨みて。(枕草紙)

二二五 かまへて

「構へて」といふ副詞で、「必ず」「きつと」「決して」「心にかけて」などの意味に用ひられる。

○ひが事 まちが  
△ひもて……  
△な

構へて(必ず)、その日のさはりあらせじと、はからふべきなり。(十訓抄) (大正五、高校)  
かまへて(心にかけて)、ひが事なりけりと、きこえなして、もてかくし給へと、のたまへば。(源氏物語)  
かまへて(決して)、人の名をいふな。(生玉心中)

二二六 かも

これは、三通りの使ひ方がある。即ち、その一つは、疑問の「か」といふ助詞に、感歎の「も」といふ助詞が添はつた場合で、疑問の意と共に、感歎の意をあらはし、①……であらうか、まあ「などの意になり、

○ちぐさ 千種  
多様。  
○ふりさげ 振り  
仰いで。

春霞、色のちぐさに見えつるは、たなびく山の花のかげかも。(花のかげであらうか、まあ、美しいこと)。(古今集)  
青海原ふりさげ見れば、春日なる三笠の山に出でし月かも。(月であらうか、まあ、なつかしいこと)。(土佐日記)

その二は、同じく、疑問の「か」に感歎の「も」が添はつて、②反動の意をあらはし、

山科の音羽の山の音にだに、人の知るべく、わが戀ひめかも。(戀ひ慕はうか、戀ひ慕はうとは思はぬ)。(古今集)

○山科の音羽の山の「音」といはんが爲の序詞。



○橋の下吹く風の「香しき」といはんがための序詞。

○やすむしろ 安穩なる席。

●なかくに なまじひに ●あらすは 人よりは △なむ

橋の下吹く風の香しき筑波の山を戀ひすあらめかも。(戀ひすにあられやうか、戀ひすにはあられない)。(萬葉集)

その三は、單に、感歎の意味をあらはし、③「かな」と同じ意味で、「…な。あ」「…わい」などの意になるのである。

はしたてのさかしき山も、わきもこと、二人越ゆれば、やすむしろかも。(だ。な。あ)。(日本紀)

大海の磯もとどろに寄する波、われて碎けて、裂けて散るかも。(わい)。(金槐集)

白露を玉になしたる九月の有明の月夜、見れど飽かぬかも。(な。あ)。(萬葉集)

わが宿の冬木の上に降る雪を、梅の花かと打見つるかも。(わい)。(古今集)

二二七 かも

希望の意味をあらはす助詞で、「が。な」と同義である。

なかくに人とあらすは、酒壺になりてしがも。(なりた。い。も。だ。な。あ)、酒にしみなむ。(萬葉集)

○五百箇磐村 極めて多くの岩の群。△まく △も

△かな

これには、更に、感歎の助詞「や」「な」「よ」などの添はることもある。

甲斐が嶺を、嶺越し、山越し、吹く風を、人にもがもや(人であればよいがなあ)、言つてやらむ。(古今集)

河の邊の五百箇磐村に草むさす、常にもがもな(何時までもあればよいなあ)、常少女にて(萬葉集)

妹がぬる床のあたりに、岩くゝる水にもがもよ(水であればよいなあ)、入りて寝まくも。(萬葉集)

二二八 からし

「辛し」で、通常①「強く舌を刺激してびり／＼する味」②「鹽氣が強い」

③「容赦をしない」「きびしい」などいふ外に、④「ひどい」「むごたらしい」「つれない」といふ意。

からう(ひどく)も、この男にいはれぬるかな。(大鏡)



○見えじ 對面し  
 △まい かな  
 ○心ゆるびなき 氣のゆるぜない。  
 ○やがて すぐさま。  
 △かば 時をうつさず。  
 ○うれへ 訴へ。  
 ○うげ 穴があいて。  
 △ながら △たりけり  
 ○水門 河海等の水の出入口。みな

今更に見えじとなり、いとからい。(つれない) 心かな。(増鏡)

(5)「つらい」「苦しい」「難儀である」の意、

いと、からい。(苦しい) 事おほく、心ゆるびなき世なり。(増鏡)  
 かく罪せられ給ふを、からく。(つらく) おぼしなげきて、やがて、山崎にて、出家せしめ給ひて。(大鏡)

からい。(つらい) 目を見さふらひつる。誰にかは、うれへ申し候らはむ。(枕草紙)

(6)「あぶない」「危い」の意などに用ひられる。

耳・鼻は、缺けうげながら、抜けにけり。がらき(あぶない) 命まうけて、久しく病みぬたりけり。(徒然草)

尙、「からく」と副詞形になる場合には、(7)「からうじて」と同じ意味で、「やつと」「やうやう」などの意につかはれることがある。

男女、からく(やつと) 神佛を祈りて、この水門を渡りぬ。(土佐日記)

二二九 がり (小笠原信、桐生高工、上田龍孝)

通常、「許」の字を當てるが、或語について、副詞とする接尾語で、「の許に」の意に用ひられる。

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり(許に)、いふべき事ありて、文をやるとて。(徒然草)

紀有恒がり(の許に) いくたるに、ありきて、おそく來にけるに。(伊勢物語)

約束の僧のがり(許に) いくきて。(宇治拾遺物語)

三三〇 かりそめ (高橋高商、水市)

「假初」の字を當て、(1)「ちよつと」「間に合せ」「かり」「一時のこと」などの意、

あざやかなる疊ひとひら、かりそめ(間に合せ)に、うちしきて。(枕草紙)

いと便なき海邊の風も、たまらぬ松蔭などに、ただかりそめ(かり)に造りたる藪屋どものさま、浪打ちよせなば、やがて、流れも失せぬべし。(中島廣足) (大正六、山口高商) かつたきのために、身を隠さむとて、かりそめ(一時のこと)に、そりしばかりなれば、今

○やがて すぐに。  
 △べし



●眉を開く。うれしきことにあふ順境に立つ。  
○男になれらむ。選俗する意。

○玉づさ。手紙。  
○なが月。陰曆九月。  
△かも。

はた、眉を開く時になりて、男になれらむ、何のはかりかあらむ。(増鏡)  
②「根ざしの深くないこと」「ふとしたこと」の意にいふ。  
たゞ、かりそめの(ふとした)口論により。(論曲、羅生門)

一三一 かりのたまづさ。かりのたより。かりのつかひ

これ等の語は、支那の前漢時代にわたる蘇武といふ人が、匈奴に行つて囚はれ、そのまゝ抑留せられたとき、雁の足に手紙を結びつけて、漢に音信をしたといふ故事から出たことで、「交通をすること」「音信をすること」「手紙をやること」などの意にいひ、何れも同義である。

霧はれぬ空にはそこ知られども、くるを頼むのかりの玉づさ。(新後拾遺集)  
あすはまた、さかひ隔て、いせじまや、かりのつかひのゆきや別れむ。(夫木集)  
なが月の、そのはつ雁のつかひにも、思ふ心は、きこえぬかも。(萬葉集)  
雁のたよりの折毎に、筆・墨・料紙の類まで、心をこめし送物。(用明天皇職人鑑)

一三二 かる

「離」の字を當てる場合のもので、(1)「はなれる」「遠ざかる」などの意にいひ、

今ぞ知る、苦しきものと人またむ里をばかれず。(はなれず)とふべかりけり。(古今集)  
宿かれて(はなれて)、いつかもあらぬに、鹿の鳴く秋の野邊ともなりにけるかな。(千載集)

又、②「疎くなる」「間をおく」「絶える」などいふ意にもなる。  
玉にぬく、あふちを宿に植ゑたらば、山ほととぎす、かれず(絶えず)來むかも。(萬葉集)

一三三 かれがれ (陸軍士)

「離々」で、離れ遠ざかるさまにいひ、「うらやましく」といふ意に用ひられる。

○あふち。「櫻」又は「棟」の字を當て「せんたん」の木をいふ。  
△かも

△かな



うち頼むべくも見えず、かれんく。(うとくしく)のみ見せ侍る程に。(源氏物語)  
新陽明門院も、初は、御おほえあるやうなりしかど、次第に、かれがねなる。(うとくしく)  
い)御事にて、御ひとりれがちなり。(増鏡)

一三四 かんがへ

「考」の字を當て、普通、(1)「思ひはかる」「かんがへる」「思案する」などの意味に用ひられる外に、(2)「勘當する」「答める」「叱責する」などの意味にも用ひられることがある。

△いみじう  
○瀧口 清涼殿の  
東北方の瀧水の落  
つる所にある陣所  
へ候する武士。  
△さへ

△△△△腹立ち叱りて、かんがへ。(咎め)て、瀧口にさへわらはる。(枕草紙)  
△△△△いみじう腹立ち叱りて、かんがへ。(咎め)て、瀧口にさへわらはる。(枕草紙)  
那のつかさ、頭白き翁の侍りけるを、めしかんがへん。(叱責せん)とし侍りにけるとき、  
翁のよみ侍りける。(拾遺集)

一三五 きえいる

「消え入る」で、(1)非常に感動して正氣を失ふ」「喪神する」「人事不省

になる」などの意にいひ、

△え……す  
△えも……す  
○よべ 昨夜。

いふ人もきえいり。(正氣を失うて)えいひやらず、聞く心ちもまどひぬ。(源氏物語)  
辨のおとどといふに傳へさすれば、きえ入り。(喪神し)つゝ、えもいひやらず。(枕草紙)  
又、(2)「死ぬる」「息が絶える」意にもいふ。  
よべ、俄かにきえいる。(死んだ)人の侍りしにより。(源氏物語)

一三六 きえかへる

「消え返る」で、「死ぬやうな氣持がする」「消えいるほどつらく思ふ」意味に用ひられる。

○消えかへり  
にある「雪」の縁語  
ともなつてある。  
○ほど 隔たつて  
ある所。距離の遠  
いこと。  
○はつかに わづ  
かに。  
○きえかへる「み  
づのあわ」の縁語  
ともなつてある。  
△がな

消えかへり。(死ぬほどつらく思ひながら)、眺むる空もかきくれて、ほどは雲居ぞ、雪にな  
りゆく。(十六夜日記)  
あな戀し、はつかに人をみづのあわの、きえかへる。(死ぬほどつらい氣持がする)とも知  
らせてしかな。(拾遺集)



一三七 きえはつ

「消え果つ」で、通常、(1)「すっかり消えてしまふ」「消えてなくなる」意にいふが、又、(2)「死んでしまふ」「息が絶えてしまふ」意。

明けかゝる程に、きえはて(息が絶え)給ひぬ。(源氏物語)

(3)「離れてしまふ」「すっかり絶えてしまふ」意にもいふ。

きえはて(離れてしまつて)、やみゆばかりか、年をへて、君をおもひのしるしなれば。(源氏物語)

(後撰集)

一三八 きえまどふ

「消え惑ふ」で、「消えているほどに思ひまどふ」意味にいふ。

はしきうたげ

いた

きえまどへる(消えているほど思ひまどへる)けしき、いと心苦しく、らうたげなれば。(源氏物語)

一三九 きこしめす

「聞き召す」で、通常、(1)「聞く」の敬語として用ひられるが、この外、(2)「飲食物をめしあがる」「行ひ給ふ」「治め給ふ」などの意にも用ひられる。

物もきこしめさず(めしあがらず)、御遊びなどもなかりけり。(竹取物語)

一四〇 きこえ

「聞ゆ」がいひすわつて、名詞となつたもので、通常、(1)「物音が聞えること」といふ意味の外に、(2)「評判」「噂」の意にいふ。

のきこえ(噂)を忍びて、歸らせ給ふほどに。(源氏物語)

世のきこえ(評判)ありければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ。(伊勢物語)

△ほど  
○せうと  
兄。



●さしもやはそ  
●んないがあるも  
●ではない

○あづま 鎌倉を  
さす  
○あて 伴うて  
○さまことなる罪  
△死罪などの意  
○ひが心得 心得  
違ひ誤解

入道殿の御孫の姫君も、参り給ふべき聞え(評判)はあれど、さしもやはと、丑したち給ふ。(増鏡)

一四一 聞ゆ (全書)

「聞ゆ」で、場合によつて、いろ／＼な意味につかはれる。

自動の場合には、通常、(1)「物音が耳にはいる」といふ意味の外に、(2)「ひろく世に知られる」「評判される」「噂がある」などの意、

源中納言具行も、同じ頃、あづまへあてゆく。あまたの中に、とりわきて、重かるべく聞ゆる(評)される)は、さまことなる罪に、當るべきにやあらむ。(増鏡)  
六波羅にも、あづまにも、いと安からぬ事と、もてさわざて、猶、かの千早を攻めくづすべしといへば、つはものども、のぼりかきなると聞ゆ(噂がある)。(同)

③「意義が明瞭である」「わけがわかる」「了解が出来る」意、よく聞えたり(意義が明瞭である)と思ひて、心もとどめぬことに、思ひの外なる、ひが

心得の多かるものなれば。(本居宣長)

聞えぬ(わけのわからない)ことどもいひつゝ、よるめきたる。(徒然草)

④「申す」「名づける」の意などにいふ。

中御門中納言宗行ときこえし(名づけられた)人の、罪ありて、東へ下られけるに。(東關紀行)

宣耀殿の女御ときこえける(申す)は、小一條の左大臣の御むすめにおはしましければ、誰かは、知り奉らざらむ。(枕草紙)

他動の場合には、普通、(5)「言ふ」の敬語として、「申す」「申しあげる」意にいふ。

「古今の歌二十卷を、皆、うかへさせ給はむを、御學問には、せさせ給へ。」となむ、聞えさせ(申させ)給ひける。(枕草紙)

うちつけなるものから、立ちかへる春のほぎこときこえ(申し上げ)侍り。(加藤千藤)明治四二、専門)

△かは  
○古今 古今集  
●うかへ 思ひうかへ 誦誦する  
●うちつけ なる  
●卒爾  
○ものから なが  
○ではあるが  
○春のほぎこと  
○新年の御慶



又、敬意をあらはす助動詞として用ひられ、**⑥**「たてまつる」「まつる」「まゐらす」などの意になることもある。

●功德 現在又は  
未來を利益する善  
き作業。  
△めでたき  
●ゆいしき めざ  
ましい。  
●いらへ 答へ。

前の世に、いかばかり功德の御身にて、かく、おほすさまに、めでたき御榮を見給ふらむと、おもひやり聞ゆる。(たてまつる)も、ゆいしきまで待りし。(増鏡)  
人の問ひきこゆれば(まゐらすれば)、いはぬ事とのみぞ、いらへさせ給ひける。(同)  
をさなすと、人のあなづりきこゆる。(まつる)こそ、悪しけれと、恥しげに見ゆ。(紫式部日記)(大正三、山口高商)

一四二 ねは

「際」の字を當て、通常、**(1)**「限り」「はて」「さかひ」などの意にいひ、

○さして 閉ぢて。  
△めでたく

ふたまのきは(さかひ)なる障子、てづから、いと強くさして。(源氏物語)  
あたりをはらひて、きは(限り)なく、めでたく聞えけるに。(増鏡)

又、**(2)**「附近」「まぎは」「そば」などの意。

○身まかり 死に。  
△なむ

身まかり給ひなむとするきは(まぎは)に至りて。(村田春海)  
紅の腰、引きゆへるきは(附近)まで。(源氏物語)

**③**「時」「折」「場合」の意、

○腰に 衣裳とか袴の腰にあたる處。  
△は 腰の邊に結ぶ紐。

曉の別のきは(場合)に知られけり。またと思はぬ人のけしきは。(玉葉集)

**(4)**「分際」「身分」「分限」の意、

○やんごとなき 高貴な。  
○よるほひ 極めて。  
●いひがひなき 賤しい。  
○たゞ人 臣下。  
●あたらし 惜しい。

いと、やんごとなききは(分際)にはあらぬが。(源氏物語)  
物にも乗らぬきは(身分の者)は、大路をよるほひ行きて。(徒然草)  
かゝることは、いひがひなきもの、きは(分限)にやと思へど。(枕草紙)  
**⑤**「器量」「才幹」などの意、  
きは(器量)ことに、賢くて、たゞ人には、いとあたらしけれど。(源氏物語)

一四三 きはやか

「著しく」「はつきりと」「きはだつて」などの意にいふ。



○おどろくしう  
△おどろくしう  
△なかし

「こは誰ぞ、おどろくしう、きはやかなる(きはだつてゐる)は」といふに。(枕草紙)  
はしの、いと、きはやかに(著しく)筋かひたるもなかし(同)

一四四 きほふ・きほひ

○あた 敵兵。  
△ほど

「競」の字を當て、「きほひ」は、(1)「張り合ふ」「きそひ進む」などの意、  
谷の嵐のおとづるゝも、あたのきほふ(きそひ進んで来る)かと、肝をけす。(増鏡)  
けふ降りし雪にきほひて(張り合つて)、わが宿の冬木の梅は、花咲きにけり。(萬葉集)  
又は、(2)「いきほひたつ」「勇みたつ」意にいひ、  
流されし人々、ほどなく、きほひ(勇みたつて)のぼるさま、枯れにし草木の、春にあへ  
る心地す。(増鏡)  
「きほひ」は、動詞がいひすわつて、名詞となつたもので、(3)「張合」  
「競争」の意とか、  
尾になりなむとおぼしたれど、かゝるきほひ(競争)には。(源氏物語)

④「餘勢」「はすみ」の意とかにいふ。  
貴むるきほひ(はすみ)に、當るまいものでもござりませぬ。(狂言・閻罪人)

一四五 くづほる

△かな  
○がうじ  
みかん  
△だに  
○諫め  
訓戒し。

「頽」の字を當て、(1)「衰へる」「老朽する」の意、  
老いくづほれ(衰へ)たらむ人のやうにも、のたまふものかな。(源氏物語)  
いたう、くづほれ(衰へ)させ給へるに、この頃となりては、かうじなどをだに、ふれさせ給はずなりにたれば。(同)  
②「落膽する」「意氣沮喪する」「氣かくれする」「意なきにいふ」  
「我なくなりぬとて、口惜しう思ひくづほる(意氣沮喪する)な」と、返すく諫め置かれ  
侍りしかば。(源氏物語)

一四六 くま (源氏物語)

「隈」「曲」「阿」などの字をあて、通常、①「曲り窪んで、入り込んで



△や 風木を吹き枯らす風で、秋から初冬にかけて吹く。  
 △心 たてじとみ 衝立のやうに立てた。薙は格子の裏へ板を張つたもの。  
 △がな

かる處」「奥まつてゐる處」「物蔭に隠れてゐる處」「片寄つてゐる處」などの意にいひ、

かの浦に、しづかに、かくろふべきくま(奥まつてゐる處)侍りなむや。(源氏物語) 吹き拂ふ四方の風、心あらば、憂き名を隠す限(物蔭に隠れてゐる處)もあらせよ。(狭衣物語)

②「くらがり」「かげ」「曇り」などの意、

月の少しくま(かげ)ある、たてじとみのもとに、たてりけるを知らで。(源氏物語)

③「心の隔てあること」「心の中の秘密」などの意は用ひられる。

思ふてふ、人の心のくま(秘密なこと)ことに、立ちかくれつゝ、見るよしもがな。(古今集)

おのづから、人の心のくま(秘密)もあらば、さやかに照せ、秋の夜の月。(新後拾遺集)

一四七 くまなし (源氏、東家高麗、朝生花工、東家風天寶)

「隈無し」で、通常、(1)「隠れてゐる處がない」「曇りがない」意味にいひ、

△かは 一友まは

花はさかりに、月はくまなき(曇りのないの)をのみ、見るものは。(徒然草)

夜ぶかく、志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月、くまなく(曇りなく)、澄みわたりに、寄せかへる浪の音も、さびしきに。(増鏡)

(2)「心は隔てがない」「心は秘密がない」「心はうしろぐらい處がない」の意、

わが、いとくまなき(隔てのない)御心ならひに、おほし知らるれば。(源氏物語)

(3)「ぬかりがない」「十分に行き届く」意などにいふ。

くまなき(行き届いた)物言ひも、定めかれて、いたく打ちなげく。(源氏物語)

一四八 くものうへ

△ながら △や



さうざうしき  
さびしい。

△を

浅茅生 茅のま  
ばらに生へてある  
ところ。

「雲の上」で、通常、(1)「雲のある高い處」「空」「天」などの意にいふが、  
又、(2)「禁中」「皇居」「内裏」の意にもいふ。

いとそうざうしき雲の上(禁中)なり。(増鏡)

とりあへず、雲の上(皇居)を出てさせ給ふ。(同)

雲のうへ(内裏)の春こそ更に忘れられ、花は數にも思ひいでじな。(千載集)

一四九 くものうへびと

「雲の上人」で、「禁中に居る人々」をいふ。そして、通常は、「公卿・殿  
上人」等をいふが、時には、「主上」とか「女房」とかまでいふことがあ  
る。

忠盛、三十六にて、始めて昇殿す。雲の上人(殿上人)是を猜み憤り。(平家物語)

いとどしく、蟲の音しげき浅茅生に、露おきそふる雲の上人(女房)。(源氏物語)

一五〇 くもぬ

「雲居」であるが、時には、「雲井」の字を當てることもある。もと、(1)  
「雲の在る處」「空」「天」「雲」等の意味にいふが、轉じて、(2)「遠く離  
れてゐる處」の意。

雲ぬ(遠く離れてゐる處)にも、通ふ心のおくれれば、別ると、人に見ゆばかりなり。  
(古今集)

限りなき雲ぬ(遠く離れてゐる處)のよそに別るとも、人を心におくらはさんやは。(同)

(3)「禁中」「内裏」の意

星合の空の光となるものは、雲居(内裏)の庭に照すともし火。(續千載集)

手折らずば、秋の宮人いかでかは、雲ぬ(禁中)の春の花を見るべき。(新千載集)

(4)「都」の意などにいふ。

秋の夜のつきげの駒よ、我が戀ふる、雲ぬ(都)にかけれ、時の間も見む。(源氏物語)

元令

おくれれば、つ  
いてゆくから。  
おくらさん後  
す。おくれさ  
す。  
△やは  
○星合 陰曆七月  
七日の夜、牽牛織  
女の二星の相會す  
ること。  
△いかで  
△かは  
○つきげの駒  
を駒になぞらへ  
ていふ。







△なむ  
○からに ので。  
ゆゑに  
○途にゆく道 死  
ぬること  
△けり  
●ふりはへて わ  
さく  
○ものより 何よ  
り  
○さとし 告げ知  
らせ。

る。「尙更」「一層」などの意に用ひられる。

わすれなむと、思ふ心のつくからに、ありしよりけに。(まさつて)、まづぞ悲しき。(古今集)  
途にゆく道よりもけに。(一層)悲しきは、命のうちの別れなりけり。(續後撰集)  
ふりくらし侍る此頃の空をば、いかながめ給ふにかと、日毎思ひ参らせしを、ふりはへて、いとこまやかに示し給はるこそ、ものよりけに。(結構に)おほえ侍れ。(村田春海)

一五五 け

「怪」の字をあて、(1)「怪しいこと」「ふしぎなこと」「の意にいひ、け。(怪しいこと)ども、未然に、凶を示しけれども。(太平記)  
又、(2)「ものゝ祟り」「ものゝけ」の意にもいふ。  
天變類りにさとし、世の中静かならぬは、このけ。(ものゝ祟り)なり。(源氏物語)

一五六 け

「褻」の字を當て、「平常」「晴れでない」「公でない」「ふだん」などの意にいふ。

合。はれ 晴れの場

ことに、打ちとけぬべき折節ぞ、け。(ふだん)はれなく、引きつくらはまほしき。(徒然草)  
け(平常)にも晴れにも、一人の男だけに、あまやかして。(浮世風呂)

一五七 け

動詞や形容詞の上に冠らして、その意義を語めたり、「けはひ」「やうす」「ありささ」などの意味をあらはす接頭語がある。

●せうと 兄。

一五八 げ

み山木の中にも、いとけ遠く(遠く)て。(枕草紙)  
今ははや、み山をいでて、時鳥、け近き(近き)聲を、我に聞かせよ。(後撰集)  
せうとの家なども、けにくう(愉らしう)、さぞあらむ。(枕草紙)



●むつかしき事  
わづらばしい事  
うるさい事  
○越のにやあらむ  
越路(加賀)にある  
白山ではないか

●つとめて 整頓  
○はつかに わや

他の語詞の下について、「けはひ」「やうす」などの意味をあらはす接尾語である。

いと、いたく、苦しげなる(苦しさうな)さまして居給へり。(竹取物語)  
むつかしき事などもなくてありければ、いと清げ(美しさう)に、容貌もなりにけり。(大和物語)

雲の山は、實に、越のにやあらむと見えて、消えげ(消えるやうす)もなし。(枕草紙)

一五九 けいす

「啓す」で、「申しあげる」「言上する」などの意にいふが、主に、上皇とか、三后(太皇太后・皇太后・皇后)とか、東宮とかに對して用ひられる。

つとめて、(中宮の)御前にまゐりて啓すれば(申しあげると)。(枕草紙)  
東宮に參り給ひて、「はつかになむ見給へし」と、けいし(言上し)給へば。(源氏物語)

一六〇 けいめい

「けいめい」の音が轉じたもので、「經營」の字をあて、「營み設ける」と、「設備」「周旋」「斡旋」などの意にいふ。

今日は、院(龜山)の御けいめい(斡旋)にて、善勝寺の大納言隆顯、ひわりごやうのもの、いろくに、いと清らに、調じてまゐらせたり。(増鏡)  
大かた、いづれも、年に二度は、昔よりの事にて、いみじう、けいめい(營み設け)し給へば。(同)

例の中納言殿おはしますとて、けいめい(設備)しあへり。(源氏物語)

一六一 けう

「希有」とか「稀有」とかの字を當て、「めつたにない」「めづらしい」「ふしぎである」などの意にいふ。  
つゆばかりも、さわぎたるけしきなし。けう(めづらしい)の人かなとおもひて。(宇治

○ひわりご 榎破  
子で、榎の木で作  
つた辨當箱  
○清らに きれい  
に  
○調じて ととの  
へて  
○大かた 大抵  
○いみじう 甚だ  
しく

○つゆばかりも  
少しも  
○けしき 様子  
○かな であるわ  
い



○指貫 裾を縁で括り窄めてはく  
 ●おほめかしう 味につまりせず。暖  
 ●めれば。やうに  
 △かれば。やうに  
 ○細殿 寢殿作り  
 にくて、對屋と寢殿との間を連ぬるた  
 建物の廊。廊  
 ○渡殿 二つの建物を連れた廊下  
 ○何くれ 何やかや  
 ●まかげさして  
 ●まかげさして  
 「目陰さして」で、遠方を見る時、額

に手をかざすをいふ。  
 ○あさり 探し。  
 ○けしき 様子。  
 ●あさまし なさけない。  
 ○さるへき日ばかり 相應に日のたつた頃。  
 ○にほひ 艶麗なさま。  
 ●なか／＼ 却つて。  
 ●ことごまし 興をさますこと。

拾遺物語

ほとほと、過をなん仕るべく候ひつるに、けう(不思議)に、御指貫の括りを見つけて。(同)

〇一六二 けうとし

これには、もと、①うとうとい「いやらしい」意味にいふ語であるが、

しひて、おほめかしう、けうとく(うとうとし)も、なさせ給ふれば。(源氏物語) 御中のたがひにたれば、こゝなもけうとく(いやらしい)おぼすにやらむ。(蜻蛉日記)

②「恐ろしい」「ものすごい」「さみがわるい」などの意にもいふ。けうとく(ものすごい)も、なりにける所かな。さりとも、鬼なども、我をば、見免してむ。(源氏物語)

續松、高くさへげて、細殿・渡殿、何くれ、まかげさして、あさりたるけしき、けうとく(恐ろしく)あさまし。(増鏡)

屍は、けうとき(恐ろしい)山の中に、をさめて、さるべき日ばかり、詣でつゝみれば。(徒然草) ならみあげたりければ、けうとく(きみわるく)思し召して。(宇治拾遺物語)

〇一六三 けおさる (本居)

「威勢におされる」「何となく壓倒される」「劣る」「意味に用ひられる。

御さま、げに、いと殊なり。花のにほひもけおされて(勢におされて)、なか／＼、ことごましになむ。(源氏物語)

この蜜柑にくらぶれば、橘は、數にもあらず、けおされ(劣り)たり。(本居宣長)

〇一六四 けざやか (山崎)

「さやか」と同じで、「物事のはつきりしてゐる」「いちじるしい」「あざやかである」「などの意にいふ。



○さすがに。本分にそむかず。  
 ●更に。絶えて。  
 ●なごみて。和いで。  
 ●ぶい。無異。無事。  
 ●めり。やうだ。  
 ●さういふ風に見える意。

●あは。我は。

●まだし。未熟。

正月十日、空いとくらう、雲も、あつく見えながら、さすがに、日は、いとけさやか(あざやか)に、照りたるに。(枕草紙)  
 この事、更に、御門のしろしめさぬよしなど、けさやかに(はつきりと)いひなすに、荒きえびすどもの心にも、いと忝き事と、なごみて、ぶいなむべく奏しけり。(増鏡)  
 その削り跡は、いとけさやかにて(はつきりして)侍るめり。(大鏡)

一六五 けし

「怪し」又は「異し」の字を當て、(1)「並々でない」「あやしい」「賤しい」「變だ」などの意にいひ、  
 あは、けしき(怪しい)心なしと、のたまへば。(古事記)  
 昔男、けしう(賤しう)はあらぬ女を思ひけり。(伊勢物語)  
 ②「よくない」「わるい」「差支がある」などの意にも用ひられる。  
 宮内卿は、まだしがるべけれども、けしう(差支)はあらずと見ゆめれば。(増鏡)

○めれば。……のやうであるから。  
 ○おりおはします。位をお譲りになる。

○睦月。陰曆正月。  
 ●もちの日。十五日。  
 △な。

○内。内裏。  
 ○八葉の車。車箱に八葉の紋を畫いた網代車。  
 ○かな。であるわい。  
 ○御ぞ。御衣。  
 ○かづけ。纏頭として與へ。

實兼も、けしう(わるく)は侍らぬのこなり。(同)  
 己は、水の尾の帝(清和)の、おりおはしますとの睦月の、もちの日、生れて侍りしかば、十三代にあひ奉りて侍るなり。けしう(わるく)はさぶらはぬ年なりな。(大鏡)

一六六 けしかり (多量)

「怪しく有り」のついまつたもので、(1)「異様である」「あやしい」などの意とか、

内には、いつしか、けしがる(怪しい)ものなど住みつきて。(増鏡)  
 八葉の車のけしがる(異様な)に、子息の維盛、車の尻に乗せて。(平家物語)  
 ②「わるくはない」「おもしろい」とかの意にいふ。  
 「これも、けしがる(おもしろい)わさかな」とて、御ぞぬきて、かづけさせ給ふ。(増鏡)



一六七 けしからず (多量)



●思ひ聞え  
まゐらせ。 思ひ

○のいしる。 やか  
ましく言ふ。  
●腹きたなく。 意  
地わるく。

○心ざは。 心根。  
心だて。 かな

○神。 雷。

「怪しく有らず」のつゝまつたもので、(1)「怪しくない」「わるくない」「相應である」などの意。

(2)「あやしい」「ふしぎである」「並々でない」「變である」「意外である」などの意。

京も鎌倉も、さわぎの、いしるさま、けしからず(並々でない)。(増鏡)

「けしからず(變に)腹きたなくおはしけり」などといへば、のりぬ。(枕草紙)

(3)「道理にあはない」「不都合である」「穩當でない」の意。

けしからぬ(不都合な)ぬしの心ざはかな。(宇治拾遺物語)

(4)「ひどい」「甚だしい」意などに用ひられる。

電、けしからず(ひどく)閃きて、神、鳴りさわぐ。(増鏡)

一六八 けしき (小説高橋、秋田縣)

●こゝろもとなき  
待遠しく思ふ。じ

○ほど。 時期。

●ないがしるなる  
人を輕んじ侮る。

○念々に絶えず。

○廊。 廊下。

△ばかり

●ことそぎたり  
簡略である。

●思しわづらふ

△ためらふ

○格勤者。 侍をい

「景色」といふ字をあてる場合には、自然の風物のありさまをいひ、(1)「風景」「風光」などの意に用ひられるが、「氣色」といふ字をあてる場合には、さまざまの意味につかはれる。

(2)「けはひ」「やうす」「ありさま」「かたち」「しるし」などの意。

こゝろもとなきもの。子うむべき人の、ほど過ぐるまで、さるけしき(けはひ)のなき。

(枕草紙)

富める家の、ないがしるなるけしき(やうす)を聞くにも、心、念々に動きて、時として、

やすからず。(方丈記)

松の柱に、葉ふける廊など、けしき(しるし)ばかり、ことそぎたり。(増鏡)

(3)「御意」「おほせ」「心の趣」などの意。

東宮よりも、御けしき(御意)あるを、思しわづらふことありけるは、この君に奉らむの

御心なりけり。(源氏物語)

前に、江次郎といふ格勤者のありけるが、僧正の、眠りうなづくを、我に、此の餅を食へ



△てけり

と、けしき(御意)あるぞと心得て、走りよりて、手に持ちたる餅を取りて、食ひてけり。△△△

(古今著聞集)

△けり

④「氣受け」「おぼえ」「感じ」などの意。

同じ御時、小川瀬口定繼といふ、御けしき(氣受け)よきの侍りけり。△△(古今著聞集)

⑤「機嫌」「氣分」の意。

ありつる文ひきいてつゝ、御けしき(機嫌)とり給ふ。(増鏡)

⑥「仔細」「事情」の意。

「式部が所にぞ、けしき(仔細)ある事はあらむ。少しづつ、語り申せ。」と責めらる。(源氏物語)

⑦「不興」「勘氣」の意。

たゞ今にや、御使走つて、不思議なりといふ御けしき(勘氣)にやあづからむと、しづ心ない。(源平盛衰記)

一六九 けしきだつ

○ありつる 例の。

○不思議なり 奇  
怪だ。不都合だ。  
○しづ心なし 心  
配だ。不安に堪へ  
ない。

○程折。時。

○ほど 様子。  
○さす かにさう  
はいふもの。い  
かにも。  
○をかし 趣があ  
る。  
○艶なる 風情の  
ある。  
○消息 手紙をや  
ること。  
○おとなびたる  
大人だつた。

「氣色立つ」で、①「様子が見える」「様子になる」「きはだつてゐる」「著しくなる」などの意。

春深く、霞みわたりて、花も、やうく、けしきだつ(咲きかゝる)程こそあれ、折しも、雨風うちつゞきて。(徒然草)

②「様子が改まる」「様子をほのめかす」「様子ふる」「さざる」の意などにいふ。

御文など奉り給ひ、けしきだたせ(様子をほのめかし)給ひけれど。(榮華物語)  
扇をさしかくして、けしきだち(様子ぶつて)笑ふほど、さすがに、をかし。(大鏡)

一七〇 けしきばむ

①「顔色にあらはれる」「けはひが見える」「ささす」の意とか。

艶なる歌も詠まず、氣色ばめる(恨んだけはひの見える)消息もせて。(源氏物語)  
おとなびたる人の、けしきばみ(顔色にあらはして制し)いふを、きゝいれず、いひく



○はて 終り。  
 ○ありつる 例の。  
 ○さして 止めて。  
 ○なかし 面白い。  
 ○あたり 女のある所の意。  
 ○そゝる 何とな。  
 ○げしき 様子。  
 ○がてら かがたが  
 ○とみ 急。はや  
 ○殿上人 昇殿を許された人。  
 ○うちはし 打ちわ  
 たした橋。

てのはては、うちとけてねぬる後も、はづかし。(枕草紙)  
 ありつる使、かへりきて、うちけしきばめば(顔色にあらはして様子を知らせると)、ふと、よみさして、返事に、心うつすこそ、罪得らむと、をかしけれ。(同)  
 ②「様子ふる」「勿體ふる」「きどる」「いろけをあらはす」の意などにいふ。

氣色ばめる(きどつてゐる)あたりは、そゝる寒くやと、思ひ給へられしかば、いかゞ思へると、けしきも見がてら、雪をうち拂ひつゝ、まかりて。(源氏物語)  
 人々の歌、いたくけしきばみて(勿體ぶつて)、とみにも奉らす。(増鏡)  
 殿上人ども、あまた、こゝかしこのうちはい、わたどのなどに、げしきばみ(様子ぶり)つゝ、群れ居たるも、艶なる心ちすべし。(同)

一七一 けちえん

「掲焉」の字をあて、「著しい」「はつきり」「きはだつて」「目立つて」

○わたどの 二つの建物をつなげた廊下。  
 ○艶なる 美しい。  
 △べし かな。  
 ○なかく 却つて。  
 ○めやすかり 見苦しくない。  
 ○かしましく 見やかましく。  
 ○一ぞう 一族。  
 ○時の花をかざし 時に遇ひて、華やかに榮える意。  
 ○しるく 著しく。  
 ○あぢきなし ない。  
 ○さげない ない。  
 ○いかゞ どうして。

なごいふ意に用ひられる。

白きあはせなどにて、けちえんならぬ(自立たぬ)ぞ、なかく、めやすかりける。(源氏物語)

この婿の君は、あしき事をも、かしましくいひ、よき事をば、けちえんに(きはだつて)ほむる心ざまなれば。(落窪物語)  
 平家の一ぞうのみ、いよく時の花をかざし、そへて、花やかなりし世なれば、けちえむ(目立つほど)にも、もてなされ給はず。(増鏡)  
 目の前にうつりかはる世のありさま、今さらならねど、いとしく、けちえむなる(目立つてゐる)も、あぢきなし。(同)

一七二 けぢめ (高野、實家、高橋、長尾、高橋、山口、高橋、源氏)

通常、①「區別」「差別」「わかれめ」の意にいひ、

そのけぢめ(區別)をば、いかゞわくべき。(源氏物語)  
 あだし道と同じからむことを厭ひ避けて、ことさらに、けぢめ(差別)を見せ、さまなか







○した自分の生涯のこと  
○を夢に見たといふ  
○故事から出たもの  
○つゞらなり  
○どく折れ曲つてゐる  
○坂路  
○つれなく  
○氣強  
△かな  
○をか  
○趣があ  
○わざとならぬに  
○ほひ  
○ふだんから  
○たきしめてゐる香  
○のほひ  
○ものあはれなり  
○何となく感じが深い

にもいふ。

瀧の音、松の響のけはしき。(はげしいの)に、つれなくあかす岩枕かな。(後京極自歌合)

一七五 けはひ

(各書集、東家女高麗)

「そんな風に見える様子」「それらしい模様」「そぶり」「傾向」「け」「し」「な」の意にいふ。

人のけはひ(け)も、しげかりける。(源氏物語)

秋のけはひ(秋らしい模様)のたつま、に、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。(紫式部日記)

荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひ、しめやかにうちかをりて、しのびたるけはひ(世を忍んで住みなしてゐるやうな様子)、いとものあはれなり。(徒然草)

一七六 けむ

(各書集)

この助動詞には、二通りの用法がある。普通は、動詞の連用形について、(1)過去時の動作有様を推量するに用ひられ、「……なであらう」の意になるが、

よからぬもの蓄へ置きたるもつたなく、よきものは、心をとめけむ。(心をとめてゐたであらう)と、(はかなし。(徒然草))

承安のころほひは、御年十六ばかりにや、ならせおはしましけむ。(十六くらゐにも、なつてゐらつしやつたのであらう)。(平家物語)

たらちねは、かゝれとてしも、うばたまの我が黒髪を撫でずやありけむ。(撫ではしなかつたであらう)。(後撰集)

又、形容詞の語根に添うて、(2)未來時の動作有様を推量するに用ひられ、「であらう」の意になることがある。

梓弓ひき野の葛、末つひに、わが思ふ人に、言の繁けむ。(噂が繁くなるであらう)。(古今集)

△はかなし

○たらちね  
○は母親  
○うばたまの  
○「黒」といふ語にか  
○けた枕詞

○梓弓「ひき」と  
○いふ語にかゝる枕  
○詞



○玉ぼこり。道にかゝる枕詞。道に道行ぶり。途中にて逢ふこと。

△も  
○あしびきの山にかゝる枕詞。山と山との間。山

櫻花散らば惜しむ。(惜しいであらう)。玉ぼこの道行ぶりに折りてかさむ。(新勅撰集) 都邊に立つ日近づく、飽くまでに、相見て行かぬ、戀ふる日多けむ。(多いであらう)。(萬葉集)

一七七 けらし

これは、過去の助動詞「けり」と、推量の助動詞「らし」とが結合して出来た「けらし」のついたもので、通常、(1)過去のことを推量する場合に用ひられるが、

櫻花、咲きにけらしも(咲いたらしいわい)あしびきの山のかひより、見ゆる白雲。(古今集)

忍びて、心通はせたる人ぞ、ありけらし(あつたらしい)。(源氏物語)

又、轉じて、(2)「けり」の或場合と同じく、單に過去の意をあらはし、又は、感歎の意にいふ場合もある。

○かいやり。掻き破つて。本意なげれば。不本意である。憾である。

○のいしる。やかましくいふ。○翻譯。喧嘩。○あさましきこととんでもないこと。

○ほどこに。うちに。○消息。手紙をもつてくること。音信。

かいやり捨てむも、本意なげれば、兒童に與へて、讀ましめむとて、暫く殘しおきけらし(残しておいたのである)。(室鳩巢) この山は、日本武尊の言葉を傳へて、連歌する人のはじめにも名づけた。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず。まことに、愛すべき山の姿なりけらし(姿であるわい)。(松尾芭蕉)

一七八 けり (各舉)

この助動詞は、通常、(1)過去の意をあらはすに用ひられるが、

南面の方に、のいしるもの、聲しけり(聲がした)。(宇治拾遺物語) 翻譯おこりて、あさましきことどもありけり(あつた)。(徒然草)

又、(2)詠歎の意味をあらはす場合もある。

沖の方に、いとちひさき木の葉の浮べると見えて、漕ぎくるを、海人の釣舟かと御覽するほどに、都よりの御消息なりけり(あつたのであるわい)。(増鏡)



○苦屋 苦で屋根をふいた粗末な家。

○大殿ごもらない。御寝にならぬ。○敷へてつもつて。重なつて。○さすがに。いかにも。△にけり。○ばくち。ばくち。○たばかり事。うそ。○はり事。うそ。

家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。(すきんでしまつたのであるわい)。(土佐日記)  
見渡せば、花も紅葉もなかりけり。(いふに足りなかつたのであるわい)。浦の<sup>じやう</sup>苦屋の秋の夕暮。(新古今集)

一七九 ころす

「困す」で、「こまる」「苦しむ」「つかれる」「なやむ」などの意にいふ。いと苦しければ、ころす(つかれ)て、うち眠れば。(枕草紙)  
夜も、大殿ごもらぬ日敷へて、さすがに、いたう、ころす(つかれ)給ひにけり。(増鏡)ばくち、せめられ、ころす(こまつ)て、かのためばかり事を申す。(宇津保物語)

一八〇

ころす ころすのころもころすのころもでころすのころもころすのころもでころすのころもと(東葉集、草門)  
「こけのころも」は「苦の衣」で、(1)苦を衣に見たてていふ場合と、

岩の上の苦の衣(苦)も埋もれず、たゞ、ひとへなる今朝の白雪。(玉葉集)  
(2)僧侶とか山伏とか山住の人とか、隠者とかの着たる衣にいふ場合とある。

○とぶらひ 訪うて来る。

○やつれ 身をやつし。

△かは

山伏のこけの衣(衣)をぬぎ、松の葉をつみみて、深き山より、とぶらひ侍るも。(宇津保物語)

それから、「苦の衣手」「苦のさ衣」「苦の袖」「苦の袂」などは、何れも、「苦の衣」の(2)の場合と、同じ意味に用ひられてゐる。

み熊野の南の山の瀧つ瀬に、三年ぞぬれし、苦の衣手(衣)。(玉葉集)

美麗を好みて寶を費し、これを棄て、苦の秋(僧衣)にやつれ、勇める心盛りにして、ものと争ひ。(徒然草) (大正五、東京高麗)

月影の秋は夜寒になりぬとも、誰かはうたむ、苦のさ衣(衣)。(新千載集)

おもひやれ、さらでも濡る、苦の袖(衣)、曉おきの露のしげさを。(新後撰集)

一八一 こけのした







い。さかし。けはし。

○あとのあとなわさ  
死者のあとなわさ  
こと。に。いたは  
△だに。いたは  
○あはれ。いたは  
△を。いたは  
○主殿の伴の御奴  
主殿の伴の御奴  
禁庭の掃除などを  
するもの  
△ばかり  
○あさぎよめ 朝  
△な  
●にははざらまし  
咲かすにゐてほし  
い。

い。さかし。けはし。そびえて、道いとさかし。(村田春海)

一八五 二ころ (高草、東京高師、廣島高師、東京高師、形勝高師、本深、  
高工、東京農大、東京外語、香海、各農事専門)

「心」の字をあて通常、(1)「精神」「意識」「智情意のはたらき」をいふが、  
又、場合によつて、いろいろの意味に用ひられるので、今、古文を解  
釋する上に、紛れ易いとか、間違ひ易いとか、解しにくいとかいふや  
うな場合について、説明して置かう。

(2)「なさけ」「おもひやり」「同情」などの意。

あといわわざも絶えぬれば、いづれの人と、名をだに知らず、年々の春の草のみぞ心(な  
さけ)あらむ人は、あはれと見るべきを。(徒然草)  
主殿の伴の御奴、こころ(おもひやり)あらば、この春ばかり、あさぎよめすな。(拾遺  
集)  
心(同情)あらば、頃も憂き世の梅の花、折忘れすば、にははざらまし。(増鏡)

(3)「思慮」「注意」「かんがへ」「豫期」などの意。

おなじ心(かんがへ)なる友に、おほえければ、いとあはれにて、悲しき事も語りあはせ  
むと。(増鏡)  
路もいと悪しくて、心(豫期)より外に、笠縫の躰といふ所に、暮れ果てれど、止まる。  
(十六夜日記)

(4)「意味」「意義」「仔細」などの意。

「林間に酒を暖めて紅葉を焼く」といふ詩のこころ。(意味)をば、されば、それらには、誰  
が教へけるぞや。(平家物語)

この行には、斯かる文字ありつらむ。次には、この文字などいひて、おしはかりに、その  
心(意義)を説きて聞かせければ。(村田春海)

(5)「ふたごころ」「異心」などの意。

たえず行く、飛鳥の川の淀みなば、心(異心)ありやと、人の思はむ。(古今集)

(6)「風情」「趣」「雅致」「感興」「氣品」などの意。

○あはれにて  
にしみて。心

○林間に酒を暖め  
て云々 白樂天の  
詩の句。白樂天の  
○おしはかりに  
推量で。



○ものふりて時代がついて。○わざとならぬわざと、殊更に手を入れたのでない。△ばや。△津の國。攝津の國。△がな。○なく「ぬ」の延。△かな。○鏡なす。鏡のやうに静かな。△や。○心のゆく。満足する。

心(感興)異なる物の音を、振き鳴らし。(源氏物語)  
木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も、心(風情)あるさまに。(徒然草)  
文字のさま、心(氣品)高く、筆すみて見ゆるは。(村田春海)  
(7)「風流の心」「情趣を解する心」「趣味の豊かな心」などの意。  
心(風流の心)あらむ人に見せばや、津の國の難波わたりの春の景色を。(後拾遺集)  
椎柴・白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心(趣味の豊かな心)あらむ友もがなと、都こひしうおほゆれ。(徒然草)  
(8)「心のないものを心があるやうに見なし、擬人していふ場合」  
流れ来る水の心も知らなくに、浮きても花の共に行くがな。(續詞花集)  
荒海のしほのみちひも、山川の瀧つ早瀬も、鏡なす池の面の細波も、水の心にかはることやある。(清水濱臣)  
池の心ひるかられど、魚の心のゆくを見、石立ちたる山高かられば、馴れて、鳴る小鳥を聞く。(井上文雄)

一八六 こころおそく

○か。い。づ。ら。ひ。て。拘泥して。○い。ふ。か。ひ。なく。い。く。ち。なく。△か。し。

「心が、いふ」「気が、きかない」「殿しくない」などの意にいふ。  
ふるきにか、いづらひて、とかく、とどこほれる人は、心おそく(まがめて)、いふかひなく、思はるゝわざそかし。(本居宣長)  
武藏の海はたは、大方、山いと遙にて、露霜の心おそき(殿しくない)習に侍れば。(村田春海)

一八七 こころぎは

「心際」で、「心根」「心だて」「心もち」などの意。

けしからぬ、主の心ぎは(心根)かな。(宇治拾遺物語)  
人々、なほ「すぢなきもの、こころぎは(心だて)なり」と譽めけりとか。(同)

一八八 こころぐるし

△かな。●すぢなき。道理。し。か。た。の。な。い。



○思はむ子。かは  
ゆく思ふ子。愛子。  
△△し  
△や  
○あはれ しぶん。

「心苦し」で、通常、(1)「心に苦しく思ふ」「苦にする」「氣苦勞する」などの意にいふ外に、(2)「氣の毒に思ふ」といふ意にも用ひられる。  
いと心苦し(氣の毒なほどに)もの思ふなるは、まことにか。(竹取物語)  
思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心苦しけれ(氣の毒である)。(枕草紙)  
岩木にしあらねば、心苦し(氣の毒)とや思ひけむ、やうくあはれと思ひけり。(伊勢物語)

一八九 こゝろざま (續草紙)

「心狀」で、「心のさま」「心だて」「心根」「心情」などの意。

物しりぬべき御心ざま(心情)とききて。(源氏物語)  
貌・心ざま(心根)もすぐれて。(枕草紙)

一九〇 こゝろだて

「心のさま」「心ばへ」「心性」「氣だて」などの意。  
かく、いみじき心だて(心性)により、あやしき片端なる身ながら、后となりけり。(十訓抄)

一九一 こゝろながし

「心長し」で、(1)「氣が長い」「優長である」「のんきである」などの意。  
ふけゆけば、天つ空なる雲もなし、こゝろながくぞ(のんきに)月は見るべき。(續古今集)

又は、(2)「安心する」「氣が安まる」などの意にいふ。

御命ばかりは申し請けて候ぞ、御心長く思召し候へ(御安心なさいませ)。(平家物語)

一九二 こゝろなし 金草

「心無し」で、通常、(1)「考へがない」「分別がない」「思慮がない」など

●いみじき すぐ  
●れたる。 賤し  
●あやしき 賤し  
○片端なる 缺點  
△△ながら 欠点  
△にけり



○すべ。一般に。  
 △を。誰でも。  
 ○ま。遠くの野。  
 ○方。ある野。  
 ●逢はなむ。逢ふことかと思つてゐたのに。  
 ○せ。夫又は兄を、女から親しんでいふ語。  
 △か。なりけてしまつたであらうの。  
 ○管絃。音樂。  
 ○し。み。の。う。て。音調がとぬる。  
 ○み。徹。つ。て。ある。染み。  
 ○草。木。の。緑。の。葉。が。風になびいてゐるさ。

の意にいふが、  
 すべて、人の書を借りたらむには、速に見て返すべきわざなるを、久しく止めおくは、心なし(考へがない)。(本居宣長)  
 又、②「思ひがけもない」「不意である」「偶然である」などの意とか、ま遠くの野にも逢はなむ、こゝろなく(思ひがけもなく)、里のみなかに、逢へるせなかも。(萬葉集)  
 (萬葉集)  
 心なき(思ひがけもない)眠りの内に迷ひ來て、夢とは何の見ゆるならむ。(新千載集)  
 ③「おもひやりがない」「なさけがない」「情味がない」「非情である」などの意とかにいふ  
 山里のさを鹿の音のなかりせば、心なき(おもひやりのない)身となりはてました。(拾玉集)  
 管絃のよくしみぬる時は、心なき(非情の)草木の靡ける色までも、かれに従ひて見ゆるやうに。(古今著聞集)  
 心なき(情味のない)身にもあはれは知られけり。鳴立つ澤の秋の夕暮。(新古今集)

ま。あはれものさびしい情趣。

○沙汰。評判。批評。  
 ○主。上の御方。天皇の御方に参つてゐる者共。  
 ○こ。と。ふ。り。た。る。ま。で。古くさい話となつてしまふまで。

○一九三 こゝろにくし (高等、慶應高師、東京女高師、山口高師、千葉高師、前本高工、桐生高工、多摩高工、東京外語)

「心憎し」といふ字をあて、①「何となく気が置ける」「気がねする」「うち解けられない」などの意にいふこともあるが、  
 初めこそ、心にくしも(氣がねしたやうにも)つくりけれ、今は、うち解けて。(伊勢物語)  
 多くの場合には、②「奥ゆかしい」「頼もしい」「何となくつかしい」などの意に用ひられる。  
 この度は、心にくき(奥ゆかしい)さまなりなどぞ、時の人々、沙汰しける。(増鏡)  
 主上の御方、心にくく(頼もしく)候はす。(保元物語)  
 世に、ことふりたるまで知らぬ人は、心にくし(奥ゆかしい)。(徒然草)

一九四 こゝろのおに (高等、東京高師)







●なだらかに。●かみやさしく。●めやすく。●見にくからず。

△だに。○ひわり。○楡の木で作った辨當箱。

「心馳せ」の義で、●「心さま」「氣だて」「心ばへ」「意向」の意、

○ばせ(氣だて)のなだらかに、めやすく、にくみがたかりしことなど。(源氏物語)

②「考へ深いこと」「注意の行届いてゐること」「用意周到なること」の意などにいふ。

○るばせある(注意の行き届いてゐる)人だにも、物につまづき倒るゝ事は、常の事なり。(宇治拾遺物語)

一九八 こころばへ (源氏物語)

「心延へ」の意で、通常、(1)「心だて」「心ばせ」「心さま」「氣だて」「心持」の意にいふが、

かたどけなき御心ばへ(氣だて)の、たぐひなきを頼みにて。(源氏物語)

かゝる心ばへ(心持)にて、ふりはへ來たれど、我が睡しき從者もなく、かゝれば、尋ねさすべき方もなし。(大和物語)

このおとどは、おほかた、心ばへ(心さま)うるはしく、たけくも、やさしくも、よろづめやすければ。(増鏡)

又、(2)「意義」「意味」「趣意」「趣旨」などの意。

今日のみわざを題にて、春の心ばへ(意味)ある歌奉らせたまふ。(伊勢物語)

③「風情」「趣」「雅致」「趣味」「風致」などの意にもいふ。

水の心ばへ(風情)など、さる方に、なかくしなしたり。(源氏物語)

一九九 こころみじかし

「心短し」で、「氣が短い」「氣がせはしい」「せつかちである」「考へが浅い」などの意にいふ。

水鷄に、たいげばあくる夏の夜を、心短き(氣の短い)人やかへりし。(古今六帖)

●ふりはへ。●わざ。●おとど。●大臣や公卿などの尊稱。●おほかた。●概して。●めやすければ。●見にくくない。●穩當であるから。●みわざ。●御催し。●さる方に。●その相應むきに。●それ相應に。●なかく。●趣のあるやうに。

○た。○水鷄の鳴く。○は。○戸をたたく。○やうに。○聞ゆるところからいふ。



明るる間を、なほたゞこそ、夏の夜の心短き(せつかちな)水鷗なりけれ。(新拾遺集)

〇二〇〇 ころもとなし (高等、海軍兵、陸軍士)

「心許無し」で、①「待ち遠く思ふ」「氣がせく」「じれつたい」「氣がい  
らだつ」などの意や、

ほどもなく、暮る、と思ひし冬の日の、心もとなき(じれつたい)折もありけり。(詞花  
集)

山は限りなくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さら  
に、心もとなきて(氣がせて)、船に乗りて。(竹取物語)

我が御家の三條坊門萬里小路におはしましつきたるに、歩み入り給ふほども、心もとな  
く(待遠くて)北の方、門へ走り出でて。(増鏡)

②「おぼつかない」「氣づかはない」「不安心である」「たよりない」「氣  
にかゝる」「心配になる」などの意に用ひられる。

〇折りてしまつたの  
で。  
●さらに一途に。  
〇ほども  
間も。

〇おもしろい色。  
〇つきためれつ  
いてゐるやうであ  
る。  
△かはらけ  
盃。

△ものし  
〇四つの時 四季。  
〇春夏秋冬 變  
〇ゆきめぐる  
選する。  
△や  
〇したり顔 得意  
〇すめる。するや  
うに見える。

花びらの端に、をかしきほひこそ、心もとなく(おぼつかなく)つきためれ。(枕草紙)  
この御かはらけの、いと心もとなく(たよりなく)見え待るるに。(増鏡)

二〇一 ころをやる。ころをやる。ころやり (高等、軍)

「ころをやる」「ころをやる」は、「心遣る」で、通常、①「思ひをはら  
す」「氣をはらす」「心を慰める」「憂さをはらす」などの意にいふが、

花盛り、紅葉盛りなどに、ものし給ひて、心をやり(氣をはらし)給ふなり。(宇津保物  
語)

四つ時の、ゆきめぐるに従ひて、心をやる。(心を慰む)べきすまひは、いとともか  
たしや。(村田春海) (大正八、高等)

「ころをやる」は、また、②「思ふやうに事を行ふ」「いゝ氣になる」  
「得意になる」「満足する」などの意にもいふ。

人のもてはやし、譽めつれば、心をやりて(いゝ氣になつて)、したり顔すめる、いとかた



○かたはらいなく  
笑止で。  
○なごがまし  
ばからしく。  
△さへ  
○よきほどにて  
よいかげんのこと  
△をや  
△まし  
○うしる。  
○わびすみ  
閉居。  
○めでたく  
結構

はいいたく、なごがましくさへぞ思はる。(本居宣長) (大正五、東京高師)  
よきほどにて、心をやる(満足する)をば、唐土の古の人も、よからぬことに、言ひおきけるなや。(同)  
又、「こゝろやり」は、この動詞がいひすわつて、名詞となつたもので、  
(3)「心を慰めること」「憂さをはらすこと」「慰み」「氣ばらし」「憂さはらし」などの意に用ひられる。

片岡に蕨崩えすば、尋ねつゝ、心やり(慰み)にや、若菜つままし。(大和物語)  
世にうもる、わびすみの心やり(氣ばらし)には、酒こそよけれ。(橘守部)

二〇二 ころゆく (高等、東京高師長、高師、仙臺野草、水滸草、内高師)

「心行く」で、「氣がすむ」「満足する」「氣持よく思ふ」「氣がはれる」などの意にいふ。  
いかに、御心ゆき(満足で)、めでたくおぼえて、あそばしけむと、おしはからる。(大鏡)

○ほどに 間に。  
○不便 不都合。  
○ほど まで。  
○文巻 書籍。本。  
○わたり ところ。  
○ものから もの。  
○のり けれども。  
○端の方 室の端の方。縁先とか窓先とかをいふ。  
○品 身分。地位。  
○おのがじし 各自。  
○ばかり ほど。

とく逃げ候ひなば、衰老の父、追はむほどに、倒れなども侍らば、極めて、不便なりぬべければ、かくの如く、心のゆく(氣がすむ)ほど、打たるゝなり。(古今著聞集)  
ねぐらに歸る夕鳥も、いつしが、聲しづまりて、向へる文巻も、やうく見えすなり行くに、心ゆく(面白く思ふ)わたりは、いとくちなしきものから、暫し、うちおきて、端の方に近づれば。(中島廣足)  
たかきいやしき、品ことなりといへども、おのがじし、心ゆく(満足する)ばかりなるは稀にて、たゞ、足らはぬことのみぞ、多かりける。(加藤千隆)

二〇三 こちたし (高等、東洋館)

「言痛し」の約つたもので、通常「くどい」「うるさい」「煩はしい」「しつこい」などの意にいひ、  
身、死して、財残ることは、智者のせざるところなり。こちたく(煩はしく)多かる、まして口惜し、(徒然草)



○のしり がや  
 ○上達部 公卿  
 ○殿上人 昇殿を許された人  
 ○ひゞきことにて 評判が特別で  
 ○からぶみ 漢文  
 ○おしむき 趣意  
 ○さかしら心 賢ぶる心 知つたふりする心  
 ○そほぢ 濡れ

雲間も、早や、むらく青く、入日の方は、こちたき(しつこい)まで、紅ふかく見ゆるにぞ。(松平定信)

又、②「仰山である」「大袈裟である」「すばらしい」などの意、

天下、のしりたちて、馬車、走りちがふさま、いとこちたし(仰山である)。(増鏡)  
 上達部・殿上人ひゞき具せさせ給へれば、いとこちたき(すばらしく)ひゞきことにておはしますを。(大鏡)

からぶみにいへるおしむきは、皆、彼の國人のこちたき(仰山な)さかしら心もて、いつはり飾りたる事のみ多ければ、真心にあらず。(本居宣長)

③「非常に多い」「甚だしい」「ひどい」「強い」「澤山である」などの意にいふ。

潮風の、いとこちたき(強く)吹きくるを聞きしめして。(増鏡)

曉がたより、雨少し降りて、菊の露も、こちたき(ひどく)そほぢ。(枕草紙)

二二四 ことそぐ (東京高商、東北工大)

「事殺ぐ」で、「事をはぶく」「省略する」「簡略にする」「簡単にする」

「質素にする」などの意、

所につけて、ことそぎ(質素に)からしめけれど、さる方に、しなして。(増鏡)

小柴垣などのいづらひ、よろづの調度さへも、ことそぎて(簡単に)。(中島廣足)

繪のさまを、雅にせむとすることをむねとするから、すべて、ことそぎて(省略して)くはしからず。(本居宣長)

二二五 ことだつ

「事立つ」で、「平常とかはつたことをする」「特殊なことをする」「きはだつたことをする」などの意にいふ。

人目稀なる山里も、ことだつ(特殊な)事して。(四季物語)

陸月は、ことだつ(平常とかはつたことをする)とて、質しき家にも、春盤などいふものを置く。(貝原益軒)

○所につけて 所  
 ○あらし 粗  
 ○未である 粗  
 ○さる方に それ  
 ○相應に 田舎  
 ○田舎だち 田舎  
 ○めいて 田舎  
 ○装ふこと 敷け  
 ○しつらひ 敷け  
 ○調度 手まわり  
 ○道具 手まわり  
 ○むねとするから 主とするので  
 ○陸月 陰曆正月  
 ○春盤 正月に松竹鶴龜などを作りする、栗・蜜柑・蝦・米などを盛りたる盤



二〇六 こととふ

「言問ふ」で、(1)「ものをいふ」「話す」といふ意味の外に、(2)「問ふ」「尋ねる」「質問する」といふ意味や、

こととはむ(問うてみよう)、嘘と脚とは、あかさりしわが住む方の都鳥かと。(十六夜日記)

吹きかふ風のたよりに、さすが、こととふ(様子を探れる)なぐさめもありつるを。(増鏡)

(3)「おとづれる」「訪ふ」「訪問する」意にいふ。

磯の苦屋とまやに軒をならべて、おのづから、こととふ(おとづれる)ものとは、浦に釣するあま小舟。(増鏡)  
年をへて、花のたよりにこととはむ(訪問したら)、いとゞあだなる名をや立ちなむ。(後撰集)

○あかさりしあかすに別れた。「飽か」には「赤」と「飽か」とないひかけてある。  
○さすがさうはいふものが。

○苦屋 皆で屋根をふいた粗末な家。  
○あま小舟 漁船。  
○あだ 浮遊。

二〇七 ことばのはな (神戸高麗)

「言葉の花」で、(1)「美しい言葉」「巧みなことば」「などの意とか、

散り残る法の林の梢には、言葉の花(美しいことば)の色ぞすくなき。(續千載集)

等閑の言葉の花(巧みなことば)のあらましを待つとせし間に、春も暮れぬる。(風雅集)

(2)「和歌」の意とかにいふ。

集ども、家々のもてあそび物として、言葉の花(和歌)、残れる木のもとかたく。(新古今集序)

愚なる言葉の花(和歌)も昔よりふきつたへたる風にまかせむ。(新葉集)

二〇八 ことわり (高等、各高師、各高専、各専修、各海軍、陸軍、各東京外語、専門)

「ことわり」には、「断」の字をあてる場合と、「理」の字をあてる場合とあるが、「断」の字をあてる場合には、(1)「判断」「(2)「豫告」「通告」「(3)「謝

○法の林 佛道の繁昌してあるのを林にたとへていつたもの。  
○言葉の花の色 美しい言葉つき。  
○あらし 心あて。豫期。



絶、「拒絶」「不承諾」(4)「辭退」「辭任」(5)「謝罪」などの意味で、餘り紛れないから、説明を略し、「理」の字をあてる令場についていふと、これは、場合によつて、いろいろな意味になり、紛れ易い。

(1)「道理」「筋道」「條理」の意。

大につき、小を捨つることわり(條理)まことにしかなり。(徒然草)

静かなる曉、このことわり(筋道)を思ひつゞけて。(方丈記)

沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわり(道理)をあらはす。(平家物語)

(2)「理由」「事情」「わけ」の意。

今までも、あるは思ひの外なれば、身をなげくべきことわり(理由)もなし。(續古今集)

うき身ゆゑ、何かは秋のとまるべき、ことわり(わけ)なくも、借しみけるかな。(長秋詠藻)

(3)「當然のこと」「必然のこと」「尤もなこと」「あたり前のこと」などの意。

○沙羅雙樹 印度にあるといふ木の釋迦は、この木の下にて入滅せられたといふ。

△かは △かな

○御年のほど 御年頃。  
○いとほしく いたはしく。  
△かな

○文ことば 手紙の文辭。  
●なめき 無禮な。

土さへ裂くる心地したる程は、ことわり(あたり前)の暑さに思ひなして、さまでも覺えざりしな。(遊京漫錄) (大正六、高等) 御年八十七にて、かくれさせ給ひぬ。ことわりの(死なれるのも當然な)御年のほどなれど。(増鏡) 子のかなしみには、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしく、ことわり(尤もなことである)かなとぞ、見侍りし。(方丈記) (4)「勿論のこと」「いふまでもないこと」「わかりきつてゐること」などの意。 文ことば、なめき人こそ、いとゞにくけれ。……わが得たらむは、ことわり(いふまでもなく)、人の許なるさへ、にく、こそあれ。(枕草紙)

二〇九 こよなし (高等、東京教師、東京女教師、各高等師範、海軍士、水師、専門)

「此の上もない」「殊の外である」「格別である」「類もない」などの意。 門口は、立ち出でつゝ見るに、道もさろく、はれなくしきに、行きかふ人しげく、いとに



○目うつし 目を見つして他を見ること。  
 △なむ 見ぬ世の人昔の人の。  
 ○板に彫れる 木板で印刷した本。  
 ○心なく 考へもなく。  
 ○ものいみ 陰陽道の説で、天一神や太白神の塞がり、その日を忌みて、その日の過ぐるまを、家に籠り居るなふ。  
 ●さすがに いかにも。  
 ○たうべむ 飲む。  
 ○いで どれ。

ぎはしきは、田舎に住みなれたる旨うつしこよなくて（殊の外で）、目さむる心地なむしける。（本居宣長）  
 ひとり、燈火のもとに、文ひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう（この上もなく）慰むわざなれ。（徒然草）  
 皇國のふみは、板に彫れるが少くて、漢籍よりは、こよなう（格別に）得がたきを、辛うじて得たるを、心なく、みだりに扱はれたるは。（平田篤胤）

〇 二二〇 さうざうし （東葉高師、本居）

「寂々し」で、「ものさびしい」「もの足りない」などいふ意味に用ひられる。  
 御ものいみにこもりて、さすがに、さうざうしく（ものさびしく）こそあれ。（枕草紙）  
 この酒を、ひとりたうべむが、さうざうしければ（もの足りないので）、申しつるなり。（徒然草）  
 いで、さうざうしきに（ものさびしいので）、いざたまへ、昔物語して、このおはさう人々

○いざたまへ さいふ。  
 ○おはさう人々 さいふ。  
 ○おいでになる人々 さいふ。  
 ●さば それでは。

に、さば、古への世は、斯くこそありければ、聞かせ奉らむ。（大鏡）  
 それから、「さわがしい」意味に、「さうざうし」といふことがあるが、それは、「騒々し」の字を當てる場合で、こゝにいふのとはちがふ。そして、意味がわかりきつて紛れないから、別に説明しない。

〇 二二一 さうなし （廣島高師）

「さうなし」には、「左右無し」の字をあてる場合と、「雙無し」の字を當てる場合とあつて、意味が違ふ。  
 「左右無し」の場合には、通常、①「かれこれこまよはない」「ためらはない」「猶豫しない」「たやすい」「雑作もない」などの意に用ひられるが、  
 ありきまはりては、さうなく（雑作もなく）、湯殿へ行きて、はだかになりて。（宇治拾遺物語）



○たばかり 謀計。  
△なむ

大勢の傾き立つたるは、さうなう(たやすく)取つて返すことのかたければ、平家の大勢、後の俱利伽羅が谷へ、われさきにとぞ落ち行きける。(平家物語)  
まことのおはしまし所を、さうなく(たやすく)武家へ知らせじのたばかりにやありけむ。(増鏡)  
又、②「どちらとも決定しない」「どつちつかず」の意になることもあ

る。  
なほ、この事、さうなくて(どちらとも決定しないで)やまむ、いとわかるべしとて。(枕草紙)

それから、「雙無し」の場合には、文字通りに、③「ならびなし」「たぐひなし」「絶倫である」「無雙である」「非常にすぐれてゐる」などの意につかはれる。

鳥には、雉、さうなき(たぐひなき)ものなり。(徒然草)

二二三 さえ

○きは程。  
△なむ

「才」の字をあて、通常、①「學問」「文學」の意とか、  
さえ(學問)のきは、なまくの博士、恥しく、すべて、くちあかすべくなむ、侍らざりし。(源氏物語)

國に、さえ(學問)ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。(増鏡)

②「藝能」「才藝」「藝術」の意とかにいふ。  
行まさの朝臣、何のさえ(藝能)か侍る、筆ゆひのさえ(藝能)なむ侍る。(宇津保物語)

二二三 さが

「性」の字をあて、①「うまれつき」「性質」「本性」の意や、  
いとまなき心のさが(本性)にて、推し測り給ふに侍らむ。(源氏物語)

②「ならばし」「ならひ」「習慣」「風習」の意にいふ。  
おくれさきだつほどの、定めなきは、世のさが(ならひ)と、見給へ知りながら。(源氏物語)

△にや  
○給へ 自分の動  
作に關する動詞に  
添へて用ひられる  
敬語。  
△ながら



●わびて 心のどかに。

○見さま 風采。

○史書 史記とか漢書とかいふ支那の歴史の書。

○尊者 目上の者。

○さらすとも そんなにしないで

○國ぶり 國風。

○ことわり 道理。

○あげつるひ 論

○絲竹のしらべ 音楽。

●うとましければ きみがわるいから。

雲の雲ゐにわびてなく聲を、春のさが(ならび)とぞわれはきつる。(後撰集)

二二四 さかし

「賢し」で、通常、(1)「才智がある」「賢い」「利巧である」の意、

ある人の子の、見さまなどのあしからぬが、父の前にて、人ともいふとて、史書の文を引きたりし、さかし(かしこく)は聞えしかども、尊者にての前は、さらすともおぼえしなり。(徒然草)

かの國ぶりとして、人の心さかし(利巧で)、何事も、ことわりをつくしたるやうに、こまかにあげつるひ。(本居宣長)

(2)「すぐれてゐる」「つよい」「氣丈である」「しつかりしてゐる」の意、

こと人のもありけれど、さかし(すぐれてゐるの)も、なかるべし。(土佐日記) 宮たちなど、まして、ひとり、さかし(しつかりしてゐる)もおはします、絲竹のしらべのみ、聞し召しならひたる御心どもに、珍らかにうとましければ、ただ、あきれ給

へり。(増鏡)

(3)「こざかしい」「小才がさく」「かしこぶる」などの意にいふ。

さかし(こざかしい)もの。……げすの家の女あるじ。(枕草紙)

さかし(かしこぶる)やうにやおぼさむと、ついで、はかばかし、え聞え給はず。(源氏物語)

二二五 さかしら (北海島天寶)

これは、通常、(1)「かしこぶること」「利巧ぶること」「知つたふりするこゝ」出来るふりすること、「生意氣なこと」の意にいひ、

さかしら(かしこぶる)人は、よし、いかにいふとも、たゞ、君に聞えむとて、かくはものし侍るになむ。(平田篤胤)

あな、見にく、さかしらなす(利巧ぶる)と、酒飲まぬ人をよく見れば、猿にかも似る。(萬葉集)

○げす 下賤。

●ついで 遠

●はかばかし 遠

○のつきり 遠

○聞え 言ひ。

○場合には、言ふ

△敬語。……す

○聞えむ 耳に入

△なむのし

○見にく 見にく

△か



○なまなかに未  
熟に。よいかけん  
に。なかくに。却  
つて。なかくに。却  
○からころろ。支  
那風。からころろ。支  
○ふさはしからず  
不適當である。

いめでたし。美し  
い。えびす心。なま  
けを知らぬ心。  
○執。執着。  
○め。しう。卑怯  
にも。意氣地なく

又、②「獨斷」「偏見」「曲解」などの意にもなる。

古の事を、あまりたしかに知り顔に語るは、多くは、文のかたはしを、なまなかに考へな  
どしたる者の、おのが、さかしら。「偏見」もて定めいふが多ければ、そは、いゝ頼み難く。  
(本居宣長)

後の世の物知り人の考へ定めたるは、なかくに、からころろのさかしら。「獨斷」のみ多  
くまじりて、ふさはしからず。(同)

二一六 さがなし

「善くない」「正しくない」「わるい」「よこしまである」「えんぎがわる  
い」などの意にいふ。

限りなく、めでたしとおもへど、さる、さがなき(よくない)えびす心を見ては、いかに  
はせむ。(伊勢物語)

君の爲、親の爲に棄てけむ身の、さる、さがなき(わるい)執をのこして、めいしう、人

△やは

○英雄。清華に同  
じ。攝家に次ぐ名  
門で、大臣、大將を  
兼ね、太政大臣ま  
でものぼることの  
出来る家柄。  
○よせ。わけ。い  
はれ。  
○故實。古い儀式。  
作法、法令等の事  
例。  
○人のがり。人の

に見ゆべしやは。(井上文雄)  
去年、今年の世のさがなき(えんぎのわるさ)うち續きたる人々の御歎ども、いはむかた  
なし。(増鏡)

二一七 さしたる。させる (東京高師)

これは、兩語とも同じ意義で、「これといふべきほどの」「別段これと  
いふ」「さほどの」などの意に用ひられる。

日の定まりたる事を、今となりて、さしたる(これといふべきほどの)障りもなきに、延  
引せしめ給ふ事。(宇治拾遺物語)

當家は、させる(さほどの)英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて、畿依の輩に  
與せざりし故に。(平治物語)

させる(別段これといふ)事のよせなければども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。  
(徒然草)

さしたる(さほどの)ことなくて、人のがり行くは、よからぬことなり。(同)



450  
250  
20

△なむ

「これぞとさして」「別段」「格別」「あんまり」などの意。  
今日は、さして(別段)申すべき事ありてなむ。(發心集)

二二八 さして

二二九 さしも (高野、東茶高野)

これは、(1)「さうも」「そのやうにも」の意とか、

世にあらむ人、神をたふとまでは、えあらぬことなるを、常になりぬることは、さしも(さうも)心にとめず、忘れをる習にて、君の惠、先祖の惠をも、さしも(さうも)思はず。(本居宣長)

(2)「さほご」「これほご」「あれほど」「かうまでも」「あゝまでも」の意

△え……ぬ  
○めでたし 結構  
○ちこども 兒ど

とかにいふ。

さしも(あれほど)君の執しおぼしめされつる紅葉を、かやうにしつることよ。(平家物語)  
さしも(あれほど)日本國に、鬼神と聞えさせ給ひたる木曾殿をば、なにがしが耶等の手にかけて、討ち奉つたり。(同)

三三〇 さすが・さすがに (高野、東茶高野、山口高野、各院)

「し。か。す。が。」の約つたもので、普通、「流石」の字をあて、(1)「さうはいふものゝやはり」「さうは思ふものゝやはり」「併しながらやはり」「これでもやはり」「何といつてもはやり」などの意。

一日片時の命も、ありがたうこそ候ひしかども、さすが(さうは思ふものゝやはり)、露の命は消えやらで。(平家物語)  
心強きは、のたまひしかども、さすが(何といつてもやはり)名残や惜しかりけむ。(保

○執し 執着し。  
○熱愛し 家來。從者。

○ありがたう 存  
○露の命 はかな  
○名残 別れて後、心に残りて忘れぬこと  
△けむ



○關伽棚 佛に供へる水と花とかのせる棚。  
△べし

元物語  
關伽棚に、菊紅葉など折り散らしたる。さすがに。(これでもやはり)住む人のあればなるべし。(徒然草) (大正三、海軍機關)  
又は、②「その本分にそむかず」「すぐれてゐるだけあつて」「よくその本領を發揮して」「その身にふさはしく」「いかにもよく」などの意にいふ。

○卷繪の細太刀 鞘に蒔繪を施してある細長い太刀。

よそながらは、定かならぬ所も、その國にては、さすがに。(よくその本領を發揮して)、書きも傳へ、語りも傳へて、まがひなきこともあり。(本居宣長)  
大納言は……さすがに。(その身にふさはしく)、卷繪の細太刀をぞ、はき給ひける。(増鏡)

三三三 さぞ・さぞかし・さぞな・さぞや

これ等の語は、何れも、意味は同じいが、「さぞ」は「然」に、「ぞ」といふ助詞が添はつたもので、「さぞかし」「さぞな」「さぞや」などは、「さぞ」に、更に感動の意味をあらはす助詞、「かし」「な」「や」などが添はつて、幾らか、その意味が強くなつてゐる。そして、大体、次のやうな意味にうかはれる。  
(1)「その通り」「この通り」「さやうに」「かやうに」「そんなに」「こんなに」の意。

△△ さぞ (その通りに)、おぼさるらむ。(源氏物語)  
きりくす秋の憂ければ、われもさぞ。(そんなに)、長き夜すがら、鳴きあかしつる。(堀川百首)

秋はたゞ、さぞや。(こんなにまあ) 悲しき、うべしこそ、鹿も、聲をば惜しまさるらむ。(拾玉集)

深からぬ外山の庵の寢覺だに、さぞな。(かやうにも)、木の間の月はさびしき。(新古今集)  
さぞかし。(その通り) と見ゆる人あれど、いかでかは知らむ。(枕草紙)

(2)「さだめし」「推量するに」「たぶん」の意。

△げに  
○夜すがら 夜通しに。  
○うべしこそ 道理で。それでこそ。  
△外山 端近い山。  
△だに  
△かは



△だに

よそにだに、待ちこそわたれ、天の川、さぞ(さだめし)急ぐらむ、妻迎へ船。(新拾遺集)

衆生は、心亂れ、碁の石とや、さぞな(たぶん)見ん。(國性爺合戦)

二二二 きた (北海風天巻)

「沙汰」の字をあて、今日では、通常、(1)「音信」「報告」「通知」「消息」などの意にいふが、古くは、場合によりて、いろ／＼な意味に用ひられてゐる。

(2)「とりきめること」「取り扱ふこと」「決定」「處置」の意。

前の御門は、四つにて、廢せられ給ひて、尊號などの沙汰(決定)だになし。(増鏡) 國司くだりて、國のさた(處置)どもあるに。(宇治拾遺物語)

(3)「世間の評判」「噂」の意。

人まもり、葦垣越に、我妹を、あひ見しからに、ことぞきた(評判)多き。(萬葉集)

△だに

○からに 故に。

○わたされ 移さ  
△かや

△え……で  
○姓「かばれ」で、家筋を分つ稱號、臣・連・國造・縣主等の類。  
○苗字、名字で、氏に同じい。家の名稱。新田・足利・徳川等の類。  
△かし  
○よしなき わけはわからない。

人皆、油斷なりと沙汰(噂)す。(湯淺常山)

(4)「命令」「指令」「指圖」「指圖」「仰せ」の意。

かの法華堂には、修明門院の御沙汰(指令)にて、故院、わきて、御心とどめたりし水無瀬殿を、わたされけり。(増鏡) 御輿などを、信隆・隆房の卿の北の方より、御沙汰(指圖)ありけるとかや。(平家物語)

二二三 さて

接續詞としての場合には、(1)「上の意を承けて下に移るとき」又は「新局面をかへていふとき」「そうして」「そして」「それから」の意味になり、

いけども、え逢はで、かへりけり。さて(そうして)よめる。(伊勢物語)

姓のしられさらむ人などは、苗字を正しく守るべきわざなりかし。さて(そして)、この苗字の苗の字は、よしなきことなり。(本居宣長)



○ふし 箇所。  
△ながら  
○ありなむ 置か  
う。

副詞としての場合には、②「その通りで」「そのまゝで」「それで」などの意につかはれる。

いかにぞやおほゆるふしを、さて(そのまゝで)過ぎむは。(本居宣長)  
疑はしなから、さて(そのまゝにして)あるなどは。(同)  
來ずば、さて(そのまゝで)ありなむ。(枕草紙)

二三四 さては

これは、接續詞として、「そして」「また」「および」などの意にいふ。  
犬猫、さては(および)狐など。  
弓矢持ちたる人ふたり、さては(また)しもなるもの、わらはなど三四人。(源氏物語)

二三五 さても

接續詞としては、(1)「さうして」「それから」「そして」などの意。

○てしあな  
たいなあ  
△え……で  
△や  
△べき

○あさまし  
けない  
○口つき  
△ひぶり  
△や  
物の言  
なさ

さても(さうして)、それより、「雪になりゆく」と推量<sup>おしはか</sup>りの御返りことは。(十六夜日記)  
副詞としては、(2)「それでも」「そのまゝ」の意。

さても(そのまゝ)侍<sup>まじ</sup>ひてしかなと思へど、公事<sup>おんじ</sup>どもありければ、え侍<sup>まじ</sup>はで、夕暮<sup>ゆふぐ</sup>に盤<sup>ばん</sup>るとて。(伊勢物語)  
あくがる心は、さても(そのまゝ)山櫻、散りなむ後や、身にかへるへき。(山家集)  
感動詞としては、③「一體まあ」「てもまあ」など、さうかと驚き思ふ時につかはれる。  
さても(一體まあ)あさまし<sup>あさまし</sup>の口つきや。(源氏物語)

二五六 さてやはさてもやは

共に同義で、「そのまゝにしてはおかれない」「そのまゝではいけない」の意にいふ。  
さてやは(そのまゝではいけない)とて、今宮は、侍従<sup>みまづら</sup>の命婦、かれても、しか思しし。



△やがて

となれば、やがて、仕うまつる。(榮華物語)  
さてしもやは(そのまゝにしてはおかれぬ)なれば、このよしをも、關の東へぞ、のたまひつかはしける。(増鏡)

三三七

さながら

(高等、東京女高、群馬高、陸軍整理、北海風文、水産)

○鳳形 鳳凰の形。

○べう へく。

○七珍萬寶 いろいろ  
貴いたからの意。

今日では、普通、(1)「あだかも」「ちやうど」の意にいふが、

御聲のいたゞきにするたる黄金作の鳳形の、いとさらさらしう、翼うちひろげたるありさまの、さながら)あだかも、飛びもかけりぬべう見えたるに。(大澤清臣)

古くは、(2)「そのまゝ」「それなりに」の意。

妻子なども、さながら(それなりに)内にありけり。(宇治拾遺物語)

七珍萬寶、さながら(そのまゝ)灰燼となりにき。(方丈記)

昔の枕さへ、さながら(それなりに)變らぬを見るにも、今更悲しくて、傍に書きつく。(十六夜日記)

又は、(3)「すべて」「すつかり」「みんな」「まるで」の意などに用ひられてゐる。

△△△△△  
いみじく悲しくて、つかまつりし人、さながら(すつかり)集まりて、夜晝、泣き戀ひ奉る。(伊勢集)

三三八

さのみ

(各海軍、各陸軍、千)

これは、普通、(1)「さほど」「たいして」「別段に」などの意にいふが古くは、(2)「さうむやみに」「さう一概に」「そんなに」などの意に用ひられてゐる。

すべて、月花をば、さのみ(さう一概に)、目にて見るものかは。(徒然草)(明治三七、千葉警専・明治三九、名古屋高工)

さのみ(そんなに)心弱くては、いかゞとて、つれなく振り棄てつ。(十六夜日記)

中古までも、人の、さのみ(さうむやみに)豪強なるをば、いましめられき。(神皇正統

△いみじく

△かは

○つれなく  
心強



○みさを體裁。  
○つくりあへむ  
○作りきれぬもの  
○はなはだしい  
○さのみやは「さ  
き」の意。

△ばかり  
○ものし  
○をすにいふ  
○或動作

記)

二三九 さのみやは

「それほごまで」に「さうばかり」などの意で、下に來る語にかゝつて、  
反語として用ひられる。

さのみやは(さうばかり)みさを、つくりあへむ。(方丈記)

さのみやは(さうばかり、何時までもだまつては居られない)とて、うち出で侍りぬるぞ。  
(竹取物語)

三三〇 さも

「さ」に、助詞の「も」を添へたもので、(1)「その通りにも」「そのやうに  
も」「さうも」などの意と、

さも(その通りにも)侍らす、この二年ばかり、斯くて、ものしはべれど。(源氏物語)

○思しゆるきて  
心を動かして。

誠に、さも(さやうにも)思しゆるきて、のたまはせば、いかがすべからむなどおぼす。  
(大鏡)

②「びに」「じつに」「よくも」「實際」などの意にいふ。

ひとりのみ、ながむる宿の春の日は、さも(じつに)暮れ難きものにぞありける。(玉葉  
集)

人こそは先づ入らめ、先づ、大太郎が入るべきといひければ、さも(よくも)いはれたり  
とて、身をなきになして入りぬ。(宇治拾遺物語)

三三一 さゆ

「五ゆ」で、(1)「光が澄みわたる」「あざやかにあかるい」意味とか、(2)  
「物の音が澄む」「物の音がはつきりしてゐる」意味とかにいふのは、  
紛れないが、(3)「寒さうである」「寒さが身にしみる」「ひえる」などい  
ふ意味は、わかりにくい。



かの島には、春來ても、なほ、浦風さえ(寒く身にしも)て、涙あらく、活の氷も、解けがたき世のけしきに。(増鏡)  
さゆる(寒さが身にしも)霜夜のほげしきには。(平家物語)

二三三 さらなり・さらにもいはず

「更なり」「更にもいはず」で、「いふまでもない」「勿論である」の意に  
いふ。

△だに  
●いへばえに  
●ふにいはず  
○つらく つれな  
○うつし 現實。  
△だに 枕とし  
○まきぬ

かた早天の雨は更なり(いふまでもない)、草木の花の咲き、みのるも、皆、この惠みにこそあ  
んなれ。(松平定信)  
さらなる(勿論の)事なれど、かばかりの事だに、御心まかせすなりぬる世の中、いへば  
えに、つらくうらめしからぬ人なし。(増鏡)  
更は、夜、月の頃は更なり(いふまでもない)。(枕草紙)  
うづいには、更にもいはず(いふまでもなく)、夢にだに、妹が袂をまきぬとし見ば。(萬葉集)

女は、更にもいはず(勿論)、思ひ沈みたり。(源氏物語)

二三三 さらなり

「更」で、①「その上に」「かさねて」の意、

この君、いとゆゆしかりけり。さらに(かされて)おはせむに、物いはじ。(枕草紙)

②「改めて」「あらたに」「別に」の意、

二條院の御時、さらに(あらたに)入内はべりけるに。(玉葉集)

③「一向に」「一途に」「絶えて」「一切」「決して」「少しも」の意など

に「いふ」。

よのつれの事とも、更(絶えて)に思ほへず、はじめてもを思ふ身なれば。(和泉式部日記)

さまざまの寶物、かたはしより、捨つるが如くすれども、更(一切)に目見立つる人もな

し。(方丈記)

●ゆかしかりけり  
●ひどかつた。あんまりであつた。  
○入内 皇后や女御などの儀式をと、いのへて内裏に入ること。

○目見立つる。目をとめて見る。



○えせじしない。  
○長き名なるべし。  
「長い後まで、評判  
がわるからう」の  
意。

この返し、更に(決して)えせじ、劣りたらむに、長き名なるべし。(今昔物語)

二三四 さらぬ (古き)

これは、「然あらぬ」の約まつたもので、「何事も無い様子」の意につかはれる。

おぼしめべき事なも、さらぬ(何事も無いやうな)顔にのみ、のどかに見えさせ給へるを。  
(源氏物語)

長政は、さらぬ(何事も無いやうな)體に、もてなし、人々に色代して、己が陣に歸り。  
(新井白石)

●色代 挨拶。會

二三五 さらぬわかれ (北條時義)

「避けられないわかれ」といふ義で、「死にわかれ」「死別」のことにいふ。

△まく  
△かも

老いぬれば、さらぬ別(死にわかれ)のありといへば、いよく見まくほしき君かも。(伊勢物語)

世の中に、さらぬ別(死別)のなくもがな、千代もと祈る人の子のため。(同)

二三六 さり

これは、助詞の「し」と、動詞の「有り」とが連なつて、「しあり」となり、更に約まつて、「さり」となつたもので、主に、將然形とか既然形とかの形で用ひられ、「……になつたら」「……になると」「……が來たら」「……が來ると」などの意になる。

秋さらば(秋が來たら)、今も見るごと、妻戀ひに、鹿鳴かむ出ぞ、たかの原の山。(萬葉集)

あが、主の御靈賜ひて、春さらば(春になつたら)、奈良の都に、めさげ給はれ。(同)

夕さらば(夕になると)、野べの秋風身にしてみて、鶉鳴くなり、深草の里。(千載集)

○あが 我が。  
○めさげ 「召し上げ」の意。  
△れ



秋あきされば（秋が來ると）、おく白露あきに、わが宿の淺茅あきが上葉、色つきにけり。（新古今集）

二三七

さがたなし（仙臺野草、東北農大豫）

「去り難し」で、①「立ち去りにくい」「離れにくい」といふ意ど、

さり難き（離れにくい）女男など持ちたるものは、その志まさりて深きは、必ず、さきだちて死しぬ。（方丈記）

男君さへ生れ給ひにしかば、またなく、さがたなき（離れにくい）ものに、思ひ聞えたまへり。（とりかへばや物語）

②「避けにくい」「棄ておかない」「已むを得ない」「よんどころない」などいふ意とある。

この大納言、歌の弟子にて、さがたなき（避けにくい）うへ、事のさまも、ゆるあるわざなれば。（増鏡）

大事を思ひ立たむ人は、さがたなき（棄ておかない）、心にかゝらむ事のほいを遂げずして、さながら、すつべきなり。（徒然草）（大正五、東北農大豫）

○またなく この上もなく

○ゆる 理由

○ほい 本意

○さながら そのまゝ

○聞え 敬語の助動詞

二三八

さりととも（東宮野草、海軍兵、陸軍士）

「然有りととも」の約まつたもので、「さやうであるとしても」「さうしても」「さうしたとて」「さうであつても」「それでも」の意であるが、この語の下には、よく語詞の省略せられることがあるから、注意しなければならぬ。

さりととも（さうとしても）、つひに、男あはせざらむやはと思ひて。（竹取物語）

ふりにしことを思ふにも、なほ、さりととも（それでも）、いかでか、上皇、今上、あまたおはします王城わらひやしろの、徒らに亡ぶるやうやはあらむと、頼もしくこそおぼえしに。（増鏡）

佐渡院、あけくれ、御行をのみ、し給ひつゝ、なほ、さりととも（それでも）、その中に、都に歸られる時ときがあらうと、おぼさる。（同）

雲の浮きて、漂ふを御覽じても、「山分れ、飛びゆく雲のかへりくる影見るときは、なほ頼まれぬ。」さりととも（自分は今では、斯う流されてゐるとしても、あの雲が、かへつてくる

△やは

○行 佛道修行



△べし

やうに、再び都に召し返さるることがあらう」と、世をおぼしめされけるなるべし。(大鏡)

〇 二三九 さりぬべき (源氏物語)

「然ありぬべき」の約まつたもので、(1)「さうあつてもよい」「さうある筈の」の意とか、

さりぬべき(見せてもよいもの)、少しは見せむ。(源氏物語)

②「相應な」「相當な」……するに都合のよい」「……するに足るべき」「相當に身分のある」などの意とかにいふ。

宮は、熊野におはしましけるが、大峯を降ひて、忍びく、吉野にも高野にもおはし通ひつゝ、さりぬべき(身を隠すに足るべき)限々には、よく、紛れものし給ひて。(増鏡) さかなこそなけれ、人は静まりぬらむ。さりぬべき(何か酒のさかなにするに都合のよきさうな)物やあると、何處までも求めたまへ。(徒然草)

〇限々 隅々。  
〇ものし 或動作をする。こゝでは隠れる意。

〇さしまじらはせ 宮中に於いて、人々に立交らせ。

二四〇 さる

「然有る」で、(1)「そのやうな」「そんな」の意とか、

さる(そのやうな)わざする舟もなし。(竹取物語)

年若き人の、さる(そんな)顯證の程なれば、いひにくきにやあらむ、返しもせず。(枕草紙)

(2)「然るべき」「相應な」「相當な」の意とかにいふ。

白く黒く、さる(然るべき)體なる馬。(平治物語)

さる(相當な身分の)人の手にて、あやしき歌よみて、人には聞かれじと、あながちに、つゝみ給ひしかど。(十六夜日記)

二四一 さるかた

〇あやしき 拙い。

〇顯證 晴れやかなること。

〇程 折。場合。



●なまめかしく  
上品に。  
○ゆるぎづきて  
しあるやうに。  
○ことそぎ 簡略  
○あらあらし 粗  
末である。

○さる方に  
むきに。その  
○なかく 却つ  
○なかしう 趣が  
あるか。しう  
△なむ

「然る方」で、①「そのむき」「それにふさはしく」「それ相應」などの意と、

かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方（そのむき）に、なまめかしく、ゆるぎづきて、しなさせ給へり。（増鏡）

おのがほどには、過ぎにたる御酒など、所につけて、ことそぎ、あらあらしけれど、さる方（それ相應）にしなして。（同）

②「主とする方」「それと立つる方」などの意どかにいふ。  
文の遣をば、さる方（主とする方）にて、此の方の師にせむ。（宇津保物語）

二四二 さるは

「然あるは」の約まつたもので、通常、①「さうあるのは」「それは」の意にいふが、

山里のすまひは、さびしきやうなれど、さる方に馴れぬれば、なかく、なかしうなむ。さ

○更なり。いふま  
でもない。  
○心なし。考へが  
ない。

○更に。絶えて。  
○たより。ゆかり。  
△かし

るは（さうあるのは）、花紅葉は更なり。鳥虫の聲につけても、おのづから、心をなぐさむるもの多く。（中島廣足）

人の書を借りたらむには、速に見て返すべきわざなるを、久しくとどめおくは心なし。さるは（それは）、書のみにもあらず、人に借りたるものは、何もく同じことなり。（木居宣長）

又、②「さうではあるが」「ではあるが」「だが」の意にいふこともある。十とせばかりさぶらひて聞きしに、まことに、更に、音もせざりき。さるは（さうではあるが）、竹も近く、紅梅も、いとよくかよひぬべきたよりなりかし。（枕草紙）

二四三 さるべし

「然るべし」で、①「相應である」「相當である」「都合のよい」などの意と、

人々よりあひて、さるべき（相應な）遊などせんには、たとひ、身に取りて、安からず、



●構へて 注意して

○公事 朝廷の儀式

○あなれ「あるなれの約」

○ものから もの

△なむ

●はかなき様にて おめくくと

口をしきこにあひたりとも、構へて、その日のさはりあらせじと、はからふべきなり。  
 (十訓抄)  
 さるべき(相當な)公事の折々。(増鏡)  
 (2)「さうなるべき因縁だ」「さうなるべき運命だ」などの意とある。  
 さるべくて(さうなるべき因縁で、身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の  
 攻め来りなむ時に、はかなき様にて、屍を曝さじ。(増鏡)  
 右大臣、御覺え、殊の外に、おはしましたるに、左大臣、安からずおぼしたる程に、さる  
 べき(さうなるべき運命)にやおはしけむ、右大臣の御爲に、よからぬ事出て来て、大宰  
 権帥になし奉りて、流されたまふ。(大鏡)

二四四 し (繪巻、軍門)

語調をととのへたり、意味を強めたりする助詞で、今日の口語には、  
 丁度、これに、あてはまつた言葉がないから、口語譯するには、場合

に應じて、適宜に手心して、その意味をいひあらはす外はない。

年ふれば、齡は老いぬ、然はあれど、花をし見れば(花さへ見ると、物思ひもなし。(古今集)

この國の内の人、おのづから、かまへて取ることあれども、魚し多くありければ(魚が非常  
 常に多かつたので)、池に魚滿ちて、隈りもなかりけり。(今昔物語)

むれくしき者、重だつた者、たしかかな者、さすがにいか

二四五 しか

(1)「然」の字をあて、「そのやうな」「さやう」「そんな」などいふ意味  
 に用ひられる副詞は、別に紛れないから、略していはないが、(2)過去の  
 の助動詞「き」の既然形たる「しか」は、上に「こそ」といふ係りの  
 助詞がある場合には、結びとして、終止形に用ひらるゝことがあるの

○かまへて 用意  
 をして  
 ○むれくしき者  
 重だつた者  
 たしかかな者  
 さすがに  
 いか  
 △もの



4のうき  
もか

○まだきまだその時期でないのに早くも

△なむ

は、わかりきつてゐることであるけれども、ごうかすると、(3)同じ助動詞「き」の連用形たる「し」に、疑問の助詞「か」が添はつたものと、紛れるやうなことがあるから、注意しなければならぬ。

(2)の場合。

懸すてふ我が名は、まだき立ちにけり、人知れずこそ思ひそめしか。(拾遺集) izzozやば、御使實教の中將とこそは語り給ひしか。(増鏡)

「かへすくも口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。(徒然草) (3)の場合。

つくくとむかひ居たれば、心のはてなきやうにおぼえしか。(松平定信) izzの程に行きしか、おぼえずなむ。

二四六 しきなみ

「數並」の字をあて、「しばく」「たびく」「引きついで」「絶間な

く」「しきりに」などの意にいふ

宣言として、内裏より、しきなみにしきりに召されければ。(平治物語) 急を告げらるゝこと數並(たびく)なり。(太平記)

二四七 しきる・しく

「頻」の字をあて、「度數が重なる」「頻繁である」「引き續いて物事が起る」などの意にいふ。

まうのぼり給ふにも、餘り、うちしきる(度數が重なる)折々は。(源氏物語)

世の中のさわがしく、天變もしきり(引續いて起り)、いと、あわたしきやうなれば。(増鏡)

うら悲し、春の過ぐれば、ほととぎす、いやしき(頻繁に)鳴きぬ。(萬葉集) かしふ江に、鶴鳴きわたる、しかの浦に、沖つ白波立ちしく(頻繁に立つ)らしも。(同)

二四八 しぐる (五)

○宣言 勅旨を宣へ傳へること。

○まうのぼり 参りのぼり。  
○あわたしき せはしい。  
○うら悲し 心の中に悲しく思ふ。  
○いやいよく。



「時雨」の字をあて、通常、(1)「時雨になる」「時雨が来る」「時雨が降る」などの意にいふが、

何事と思ひわかれど、神無月、しぐる。(時雨が降る)頃は、ものぞ悲しき。(續後撰集) 秋霧にたちおくれぬと聞きしより、しぐる。(時雨の降る)空も、いかゞと思ふ。(源氏物語)

又、「涙を催す」「涙が流れる」「涙が落ちる」などの意にもいふ。

まみのあたり、打ちしぐれて。(涙を流して)ひそみ居たり。(源氏物語) 火を、つくぐとながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれど、いたう、しぐれさせ。(涙を催させ)給へるを見奉るに、中将も、心づよからず、いとかなし。(増鏡) 心まどひして、さと、しぐれ。(涙が落ち)わたる袖の上も、いとゆいし。(同)

二四九 したゝむ

(東京高等、衛生高工、東京警察、秋田警察、各警察、水産、軍門)

これは、今日では、通常、(1)「書き調へる」「書きしるす」「書く」など

の意にいふが、古文では、いろいろな意味につかつてゐる。

(2)「調へる」「處理する」「まどめる」「始末する」意。

うち散らし給へるものども、とりしたゝむ(まどめる)。(落窪物語) 昔こそ、受領どもも、任のほど、その國をしたゝめ(處理し)行ひしが、この頃は、たゞ名ばかりにて。(増鏡)

(3)「氣を配る」「用意をする」「支度する」「準備する」「設備する」意。

遠きさかひより借りたらむ書は、道のほどのことなも、よくしたゝめ(氣を配り)又、人の命は、俄なることも、はかり難きものにしあれば、なからむ後にも、はふらさず、たしかに、返すべく、おきておくべきわざなり。(本居宣長) 河内國に、おのが館のありけるを、いかめしくしたゝめて(設備して)。(増鏡)(大正六、水産講習)

(4)「食ふ」「食事する」意。

菓子ども引きよせて、思ふやうにしたゝめて(食ひて)、疲れをやすめて居ける所に。(義經記)

△ほど 諸國の長官

△ほど 死  
○なからむ後 打  
●はふらさず 打  
●散らさず 打  
●おきて 處理して

○神無月 陰曆十月

○きみ 目。

●ゆいし 通りならず痛はしい意



二五〇 したぶし (並書)

「下臥」で、「物の下に寝ること」にいふ。

吉野山花の下ぶし。(花の下に寝て)にほひぞ深き袖の春風。(新後拾遺集)  
露はらふ葛の下ぶし。(葛の下に寝てゐると)渺たえて、鹿のね近きうつの山風。(夫木集)

二五一 したもゆ

「下萌ゆ」で、「下から草木などの芽が出る」意にいふ。

春日野の草葉は焼くと見えなく、したもえ(下から芽が出)わたる春の早蕨。(續後拾遺集)

二五二 しづこころなし (東家女室函)

「静心無し」で、「落ちついた心がない」「心せはしく」の意。

○なく「ぬ」の延。

○欠方の枕詞。光にか

欠方、光のどけき春の日に、しづこころなく(落ちついた心もなく)花の散るらむ。(古今集)

古里の花のほひやまさらむ、しづ心なく(心せはしく)歸る雁がね。(詞花集)

二五三 しな (並書、仙臺醫草、草門)

「品」又は「科」の字をあて、今日では、通常、(1)「品物」の意、又は、(2)「品質」「品柄」などにいふけれど、古文では、なほ、次のやうな意味にも用ひられてゐる。

③「種類」の意。

凡そ、人の面貌を打ち見るに、憎さげなると、憐れがましきとあり。また、かたましきあり、その品(種類)多くして、いくらといふ数を知らず。(新井白石)

④「地位」「身分」「等級」「種姓」の意。

陪従のしなおくれたる(身分の賤しいの)。(枕草紙)

△がましき  
●かたましき  
○陪従者  
○おくれたる劣  
つてゐる賤しい。



△なむ  
○おのがじし各  
自

○おもむき趣味  
○おくれたり劣  
つてゐる  
△めれ

○調度 手まわり  
道具

中の品(種姓)になむ、人の心々、おのがじしのためたるおもむきも見えて。(源氏物語)  
(5)「人品」「人柄」「品位」「品格」「ひん」の意。

梅は、……白きは、すべて、香こそあれ、見る目は、品おくれたり(下品である)。(本居宣長)

しな(人品)こそ、男も女も、あらまほしき事なめれ。(枕草紙)  
そばの木、しな(ひん)なき心地すれども。(同)

家居の作りざま、調度の形などは、……あまりに、心を入れて、作りなしたるには、品おくれたり(下品で)、いとほしきも多かり。(村田春海)

二五四 しのお・しぬぶ (高等、北海道大塚、水産)

「しのお」は「忍ぶ」の字をあて、四段と上二段と兩様に活用するが、場合によつて、いろいろの意味につかはれる。「しぬぶ」は「しのお」と全く同意義であるが、古い言葉で、中古以後には餘りつかはれてゐない。

(1)「かくれる」「ひそむ」「かくれて通ふ」「ひそかに通する」「かくす」「あらはれないやうにする」意。

思ふには、忍ぶる(あらはれないやうにする)ことぞ、まげにける、色には出じと思ひしものな。(古今集)

院のおほし構ふること、しのお(かくす)とすれど、やうく漏れ聞えて。(増鏡)

(2)「戀しく思ふ」「慕ふ」「思ふ」「なつかしく思ふ」の意。

忘れなむ時しのべ(思へ)とぞ、濱千鳥、ゆくへも知らぬあとなとむる。(古今集)  
高圓の、野邊の秋萩、な散りそれ、君がかたみに見つ、しぬばむ(なつかしく思はむ)。(萬葉集)

いさ知らず、なほ憂き方の又もあらば、この宿とても、しのお(戀しく思はれ)やせむ。(増鏡)

(3)「こらへる」「堪へる」「がまんする」「たへしのぶ」意。

玉の緒よ、絶えなば絶えれ、ながらへば、忍ぶる(たへしのぶ)ことの弱りもぞする。(新古今集)

△ものを

△なむ

△な……そ  
△れ

○いさどうだか。

△れ



○多<sup>△</sup>み<sup>△</sup>多<sup>△</sup>い<sup>△</sup>ので。  
 ○く<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>り<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>く  
 ○な<sup>△</sup>か<sup>△</sup>く<sup>△</sup>却<sup>△</sup>つ  
 ○い<sup>△</sup>と<sup>△</sup>ほ<sup>△</sup>しく<sup>△</sup>氣  
 △の<sup>△</sup>毒<sup>△</sup>に<sup>△</sup>○<sup>△</sup>  
 △べき<sup>△</sup>を<sup>△</sup>

人目多<sup>△</sup>み<sup>△</sup>、目こそしぬ<sup>△</sup>ぶ<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>（がまんしてゐる）、すくなくも、心の中に、わが思は<sup>△</sup>なく<sup>△</sup>に。  
 （萬葉集）  
 心ながく<sup>△</sup>しの<sup>△</sup>び<sup>△</sup>（がまんして）過したらんは、く<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>り<sup>△</sup>腹<sup>△</sup>立つ<sup>△</sup>よりも、な<sup>△</sup>か<sup>△</sup>く<sup>△</sup>恥<sup>△</sup>か<sup>△</sup>しくも  
 いとほ<sup>△</sup>しくもおぼ<sup>△</sup>え<sup>△</sup>ぬ<sup>△</sup>べき<sup>△</sup>な。（十訓抄）

二五五 しむ

○お<sup>△</sup>ほ<sup>△</sup>や<sup>△</sup>け<sup>△</sup>朝<sup>△</sup>廷<sup>△</sup>。  
 ●あ<sup>△</sup>て<sup>△</sup>伴<sup>△</sup>う<sup>△</sup>て。  
 △か<sup>△</sup>し<sup>△</sup>  
 △て<sup>△</sup>け<sup>△</sup>り

これは、本来、他<sup>△</sup>を<sup>△</sup>使<sup>△</sup>役<sup>△</sup>して、或<sup>△</sup>動<sup>△</sup>作<sup>△</sup>を<sup>△</sup>な<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>る<sup>△</sup>意<sup>△</sup>味<sup>△</sup>を<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>は<sup>△</sup>す、  
 所謂、使<sup>△</sup>役<sup>△</sup>の<sup>△</sup>助<sup>△</sup>動<sup>△</sup>詞<sup>△</sup>で<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>が、轉<sup>△</sup>じて、敬<sup>△</sup>意<sup>△</sup>を<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>は<sup>△</sup>す、尊<sup>△</sup>敬<sup>△</sup>の<sup>△</sup>助<sup>△</sup>動<sup>△</sup>  
 詞<sup>△</sup>と<sup>△</sup>なる<sup>△</sup>こ<sup>△</sup>と<sup>△</sup>も<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>て、紛<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>易<sup>△</sup>い<sup>△</sup>か<sup>△</sup>ら、注<sup>△</sup>意<sup>△</sup>し<sup>△</sup>な<sup>△</sup>け<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ば<sup>△</sup>な<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>ぬ。  
 おほ<sup>△</sup>や<sup>△</sup>け<sup>△</sup>も、許<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>給<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>しか<sup>△</sup>ば（お許<sup>△</sup>し<sup>△</sup>な<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>れた<sup>△</sup>か<sup>△</sup>ら、共<sup>△</sup>に、あ<sup>△</sup>て<sup>△</sup>下<sup>△</sup>り<sup>△</sup>給<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>そ<sup>△</sup>か<sup>△</sup>し。  
 （大鏡）  
 山崎<sup>△</sup>にて、出<sup>△</sup>家<sup>△</sup>せ<sup>△</sup>し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>給<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>て<sup>△</sup>け<sup>△</sup>り（出<sup>△</sup>家<sup>△</sup>し<sup>△</sup>て<sup>△</sup>お<sup>△</sup>し<sup>△</sup>ま<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>な<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>れた<sup>△</sup>）。（同）

二五六 しめやか

○つ<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>と<sup>△</sup>  
 の<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>び<sup>△</sup>し<sup>△</sup>く<sup>△</sup>も  
 ●つ<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>と<sup>△</sup>  
 の<sup>△</sup>思<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>に<sup>△</sup>沈<sup>△</sup>み<sup>△</sup>な<sup>△</sup>が  
 ○そ<sup>△</sup>ぞ<sup>△</sup>ろ<sup>△</sup>何<sup>△</sup>と<sup>△</sup>な  
 ○い<sup>△</sup>へ<sup>△</sup>ば<sup>△</sup>え<sup>△</sup>に<sup>△</sup>何  
 ○な<sup>△</sup>か<sup>△</sup>し<sup>△</sup>き<sup>△</sup>趣<sup>△</sup>の  
 ○あ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>

これは、「もの静かである」「うちしめつて静かである」「うち沈んで静  
 かである」「しんみりと」等の意にいふ。  
 つれ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>と<sup>△</sup>降<sup>△</sup>り<sup>△</sup>く<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>し<sup>△</sup>て、し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>や<sup>△</sup>か（うちしめつて静か）なる宵<sup>△</sup>の<sup>△</sup>雨<sup>△</sup>に。（源氏物語）  
 し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>や<sup>△</sup>か<sup>△</sup>に（もの静かに）、つれ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>と<sup>△</sup>籠<sup>△</sup>り<sup>△</sup>居<sup>△</sup>た<sup>△</sup>れば。（増鏡）  
 板<sup>△</sup>戸<sup>△</sup>お<sup>△</sup>し<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>け<sup>△</sup>た<sup>△</sup>れば、吹<sup>△</sup>き<sup>△</sup>入<sup>△</sup>る<sup>△</sup>風<sup>△</sup>、そ<sup>△</sup>ぞ<sup>△</sup>ろ<sup>△</sup>寒<sup>△</sup>く<sup>△</sup>て、し<sup>△</sup>め<sup>△</sup>や<sup>△</sup>か<sup>△</sup>に（しんみりと）うちか<sup>△</sup>を<sup>△</sup>れ  
 る<sup>△</sup>花<sup>△</sup>の<sup>△</sup>香<sup>△</sup>、い<sup>△</sup>へ<sup>△</sup>ば<sup>△</sup>え<sup>△</sup>に、な<sup>△</sup>か<sup>△</sup>し<sup>△</sup>き<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>け<sup>△</sup>ほ<sup>△</sup>の<sup>△</sup>な<sup>△</sup>り。（近藤芳樹）

二五七 しも

○か<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>は<sup>△</sup>一<sup>△</sup>方<sup>△</sup>で

これは、語調を強める助詞の「し」に、感動の意をあらはす助詞の「も」  
 を添へたもので、語調を整へ、又は意味を強めていふために用ひられ  
 るものである。  
 人<sup>△</sup>の<sup>△</sup>、も<sup>△</sup>の<sup>△</sup>を<sup>△</sup>問<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>た<sup>△</sup>る<sup>△</sup>に、知<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>ず<sup>△</sup>し<sup>△</sup>も<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>じ（知<sup>△</sup>ら<sup>△</sup>な<sup>△</sup>い<sup>△</sup>こ<sup>△</sup>と<sup>△</sup>は<sup>△</sup>よ<sup>△</sup>も<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>ま<sup>△</sup>い）。（徒然草）  
 い<sup>△</sup>と、か<sup>△</sup>う<sup>△</sup>し<sup>△</sup>も（かうまで思<sup>△</sup>ひ<sup>△</sup>な<sup>△</sup>げ<sup>△</sup>い<sup>△</sup>て<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>と）人<sup>△</sup>に<sup>△</sup>見<sup>△</sup>え<sup>△</sup>じ<sup>△</sup>と、か<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>は<sup>△</sup>、お<sup>△</sup>ほ<sup>△</sup>し<sup>△</sup>静<sup>△</sup>む<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ど。



(増鏡)  
京に、思ふ人なきにしもあらず(ないことはいない)。さる折しも(丁度、そんな折に)。(伊勢物語)

すべて、世の人の住家をつくるならひ、必ずしも、身の爲にはせず(きつと、自分の身の爲にばかり作るものとは限らない)。(方丈記)

二五八 しるし (東京新聞、小説)

「著し」で、「きはだつてゐる」「明らかである」「はつきりしてゐる」「いぢるしい」などの意にいふ。

まつりごと大事と、おぼされけるほども、しるく(明らかに)聞えて、いと、いみじく、やむことなくは侍れ。(増鏡)

梅の花、匂ふ春べは、くらぶ山、間に越ゆれど、しるく(はつきりして)ぞありける。(古今集)

△ほど  
●いみじく  
●すぐ  
●やむことなく  
●貴く

○けはひ 様子。  
○口ずさみ 吟じ。

あるじは、喜べるけはひしるく(いぢるしく)て「年に稀なる」など、口ずさみつ。(村田春海)

二五九 しるべ

「導」の字をあて、(1)「知るべきたより」「みらびき」「てびき」などの意。

鹽焼く煙のなびく方を、わがふる里のしるべ(知るべきたより)かとばかり、ながめ過ぐさせ給ふ。(増鏡)

然るべき佛神の御しるべ(みらびき)と、うれしく思ふこと限りなし。(十訓抄)

又は、(2)「道しるべ」「道案内」「先導」「案内者」「先導者」などの意にもいふ。

木の間より、もり出でたる月をしるべ(道しるべ)にて。(榮華物語)

しるべ(先導)する道こそ、あらずなりぬとも、淀の渡は、忘れしもせじ。(増鏡)

○あらずなりぬ  
○昔とは變つてしま  
△しるべ



二六〇 ず

未來の助動詞の「む」の下に、「とず」を連ね、動作の將に起らんとする形勢をあらはし、

火、將に消えむとず。  
水、將に濁れむとず。

などいふことがあるが、この「むとず」は、古くは、「と」が省かれて、「むず」となり、或は、「む」も「と」も省かれて、「ず」となる場合がある。そして、これは、動作の將に起らうとする形勢を示し、又は語意を強めるもので、一寸間違ひ易いから、注意しなければならぬ。

△なむす

△ませうす

必ず死なむす(死ぬるであらう)。(大鏡)  
強ひて仕うまつらせ給はむ、消え失せなむす(消え失せてしまひませう)。(竹取物語)  
まづ、少しまどろみませうす(せまうわい)。(狂言、葛山伏)

○きつと 儘かに、  
相違なく。  
○しや 人を嘲り  
罵る時に發する  
聲。

秀吉が心に、狐の入りかはりたるいはれ、きつと申せ、申し損じなば、しや首、打落しくれむす(くれようぞ)。(新井白石)

二六一 すがら (高き)

接尾語で、(1)「ながら」「それなりに」「そのまゝに」の意、

行きすがら(ながら)心もゆかず、別路は、猶ふるさとのことぞ悲しき。(永久百首)

路すがら(路行きながら)心も空にながめやる、都の山の雲がくれぬる。(千載集)

又は、(2)「ことごとく」「終りまで」「……ちゆう」「……通し」の意にいふ。

淺茅生の小野の草臥露寒み、夜はすがらに(夜あけまで)鹿ぞ鳴くなる。(草庵集)

夜もすがら(夜通しに)思ひやるかな、春雨に野への若菜のいかにもゆらむ。(玉葉集)

二六二 すらび・すさみ (千載集、秋田四草)

○寒み 寒いので。  
△いかに



●あさまし 思の外なる。  
 ●あながちなる 思のむやみなる。  
 ○いたづらになし 死ぬやうにし。  
 ○いきこえ 敬意をあらはす助動詞。  
 ○具足 手道具。  
 ○とりしだいめ 破りまとめ。  
 ○やりすつる 破り棄てる。  
 ●はかなき ちよつとした。  
 ○なかしく 面白く。  
 △なむ 面白

「荒」の字をあてるが、これは、「荒む」又は「荒ぶ」といふ動詞がいひすわつて、名詞となつたもので、①「いよく進むこと」「一心に物事をすること」「昂進」「熱中」「執着」の意にいひ、

厭ふべき、こはまほろしの世の中に、あな、あさましの戀のすさび（執着）や。（萬代集）あながちなる心のすさみ（昂進）に、人をいたづらになしきこえつるは。（狭衣物語）又、②「あそびごと」「なぐさみ」の意に用ひられる。

人、静まりて後、永き夜のすさび（なぐさみ）に、何となき具足、とりしだいめ、残しおかじと思ふ反古など、やりすつる中に。（徒然草）はかなきすさみ（なぐさみ）も、折にあひたるはなかしく、見所なき木草も、時を得たるは、めづらになむ、おぼゆる。（村田春海）

二六三 すさぶ・すさむ （桐生高工、西野、水野）

「荒ぶ」又は「荒む」で、自動の場合には、兩語とも大体同意義で、①「い

よく進む」「次第にはげしくなる」「威勢がはげしい」「荒れる」の意味と、

吹きすさぶ（荒れる）風は、昔の秋ながら、ありしにも似ぬ袖の露かな。（新古今集）誰住みて、あはれしるらむ、山里の、雨ふりすさむ（雨がはげしく降る）夕暮の空。（新古今集）

②「あそぶ」「もてあそぶ」「なぐさむ」の意味とにいふ。亡き人の、手ならひ、繪かきすさびたる（なぐさんだ）、見出でたるこそ、たゞ、その折の心地すれ。（徒然草）

御ふみにはあらで、手習のやうに、書きすさみ（なぐさみ）給ふ。（源氏物語）それから、「すさむ」は、他動の場合には、③「厭ひ棄てる」「嫌ひ避ける」「取りのけものにする」「打ち捨てる」意、

上壁に、窓塗り残す庵までも、すさめず（嫌ひ避けすに）宿る秋の夜の月。（拾玉集）室の遊女、……中納言顯基に思はれ奉りて、一年のほど、都になむ住みわたり侍りけるが

△ながら 以前にあつた通り。  
 ○ありし 以前にあつた通り。  
 △かな 以前にあつた通り。  
 ○あはれ 以前にあつた通り。  
 △はな 以前にあつた通り。  
 △ほど 以前にあつた通り。  
 △なむ 以前にあつた通り。



○さむみ 寒いので。  
○若み 若いので。

○衛府のすけ 衛府の次官、即ち、近衛府の中少將、兵衛衛門の佐をいふ。

△げに 陰曆十二月  
○師走

如何なる事が侍りけむ、すまめられ(うち捨てられ)奉りて、室に歸りて後。(撰集抄)  
又は、(4)「愛賞する」「なぐさみとする」「もてはやす」意にいふ。  
谷さむみ、いまだ集立たぬ鶯の、鳴く聲若み、人のすまめぬ(愛賞しない)。(後撰集)

○二六四 すまじ

これは、(1)「勢がひびくて恐ろしい」「驚くべきさまである」「大變である」などの意、  
都へ人らせ給ふも、思ひしに代りて、いと、すまじげ(恐ろしげ)なる武士ども、衛府のすけの心地して、御輿近く圍みたり。(増鏡)

(3)「ものすごい」「ものさびしい」の意、  
げに、すまじき(ものさびしい)ものに、いひおきたる師走の月も。(源氏物語)

山里の風すまじき(ものすごい)夕暮に、木の葉亂れて、物ぞ悲しき。(新古今集)

(3)「面白くない」「興がさめる」「心がすいまない」「つまらない」意などにいふ。  
すまじき(興のさめる)もの。晝ほゆる犬。(枕草紙)

世の中、すまじく(面白からず)思されながら。(増鏡)

惟方は、人もや聞くらむと、よに、すまじげ(興さめ顔)に立たれけれども。(平治物語)

二六五 すいろそいろ (高野、東洋高工、北野農大)

共に同意義で、「漫」の字をあて、(1)「何となく心が進む」「思はず知らず」「漫然」「何となく」「何の関係もない」の意、  
一杯の酒も醒めて、すいろ(何となく)寒くなりぬれば、胸ひきむけて、歸りなむとす。(橘守部)

すいろなる(何の関係もない)者に、何か、物多く給はむなど、人々いひければ。(大和)

△ながら  
△や  
△よに

△なむ



●いとほしきふ  
△びんたほしき  
△てけり

△おほかた  
○才・學問  
△△にや  
△べし

物語)

いとほしきものに思はれて、そぞろなる(無關係の)人の手より、物を多く得てけり。(宇治拾遺物語)

雪、や、散りて、そぞろ(何となく)寒きは。(源氏物語)

②「理由もなく」「わけもなく」「わけのわからない」「むやみに」の意などにいふ。

△△△△△  
△△△△△  
おほかたは知りたりとも、そぞろに(むやみに)言ひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづから、誤もありぬべし。(徒然草)  
頭中將のそぞろなる(理由もない)そらごとを聞きて。(枕草紙)

二六六

すだく

(小樽高商、各海軍)

「集」の字をあて、「集まる」「群がる」「群集する」意味はいふ。この語は、どうかすると、「鳴く」といふ意味を誤解されることがあるけれど

も鳴く意味はない。

渚々による波の音、袖に宿かる夜半の月、千草にすだく(集まる)蟲の聲、すべて、目に見、耳にふるゝ事の、ひとつとして、哀を催し、心をいたましめすといふ事なし。(平家物語)(大正七、小樽高商)

沖の白洲にすだく(群がる)濱千鳥の外は、あととふものもなかりけり。(同)  
春も老いゆく頃、蛙の時得顔に、すだく(群集する)もなかし。(松平定信)

二六七

すでに

(各海軍)

「既に」又は「已に」の字を當て、(1)「さきに」「以前に」「どくに」の意とか、

梓弓ひきみゆるべかおもひみて、すでに(とくに)心はよりにしものを。(萬葉集)

(2)「もはや」「はや」「もう」の意とかに用ひられるが、たゞ締め締め増さりければ、すでに(はや)沫をふきて、死なんとしけり。(古今著聞集)

○梓弓「ひき」に  
かけた枕詞。  
○ひきみゆるべか  
引いたり弛べた  
△ものを

○をかし面白い。



△か

す。で。に。(も。は。や)年老いて、残りの命、今いくばくもあらざれば。(本居宣長)  
古くは、又、(8)「悉く」「皆」「残らず」「全く」「まるで」の意にも用ひられてゐる。

天の下、す。で。に。(ま。る。で)おほひて降る雪の光を見れば、たふとくもあるか。(萬葉集)

二六八 すなはち ㊦

これには、「即」「則」「乃」など、いろ／＼な字をあて、漢文の方では、面倒な區別をしてゐるが、國語の方でも、場合によつて、いろ／＼な意味につかはれる。

(1)「とりもなほさず」「それがそのまゝ」「やがて」の意で、「即」の字を當てる。

麓に一つの柴の庵あり。すなはち(それがとりもなほさず)山守が居る所なり。(方丈記)  
一時の懈怠、すなはち(それがそのまゝ)一生懈怠の怠となる。(徒然草)

(2)「そこで」「それから」「さうして」「その時」の意で、「乃」の字を當てる。

二種の物を捧げて、大后に献りき。すなはち(そこで)大后ほめ給ひ、悦び給ひて。(高橋氏文)

(3)「直ちに」「すぐに」「忽ち」の意で、これも「即」の字を當てる。

●こゝじ 疲れ。  
○ある 坐る。  
○わびしれたる 困り果てた。

こゝじけるにや、ある、すなはち(すぐに)眠り聲になりたる、いとにくし。(枕草紙)  
かく、わびしれたるものども、ありくかと思れば、すなはち(直ちに)たふれふしぬ。(方丈記)

(4)「然るときは」「さうとすれば」「すると」の意で、「則」の字を當てる。  
必ずこの事を成し果てむと思ひて勵めば、すなはち(さうすれば)何事も成し得らるゝものなり。

二六九 すはすはや

これは、兩語とも同意義である。違かの出來事のために、驚いて發す



△たりけり

る感動の聲で、「そら」とか「さあ」とか譯すればよい。  
すは(さあ)見給へとて、古裡を投げ出したけり。△△△△△  
すばや(そら)、宮こそ、南都へ落ちさせ給ふなれ。(平家物語)

二七〇 すべて (并論高野)

これには、「總」の字や「凡」の字を當てるが、(1)「残らず」「悉く」「皆」「一切」「まるで」の意とか、

塵を煙の如く吹き立てたれば、すべて(まるで)、目も見えず。(方丈記)

ものことに、うれへにもるゝいろもなし、すべて(一切)うき世の秋の夕暮。(玉葉集)

(2)「おしなべて」「通じて」「一般に」「およそ」の意とかにいふ。

すべて(およそ)古をこのまむからに、よろづを、あながちに、古めかさむとかまふるは。  
(本居宣長)

よるなくもの、すべて(おしなべて)、いづれもいづれも、めでたし。(枕草紙)

○このまむからに  
好むために  
○めでたし  
結構だ  
よい。

二七一 せめて (東京屋文書)

「せめて」の義で、通常、「切て」の字をあて、場合によつて、いろいろの意味になる。

(1)「希望通りにならなければ、その一部分だけでも」「已むを得なければ」「せめての事に」「……だけでもよいから」などの意。

せめて(已むを得なければ)、近きほどにと、あづまより奏したりければ。(増鏡)

世にもるゝうき名を、せめて(せめての事に)、限りなく、つゝみし人に知らせずもがな。  
(草庵集)

(草庵集)

(2)「強ひて」「無理に」「切に」「是非とも」の意。

舟のうちをなむ、せめて(強ひて)見る。(竹取物語)

はづかしく、いみじけれど、せめて(無理に)のたまへば。(宇津保物語)

(3)「非常に」「いたく」「甚だしく」の意。

○ほど 處。  
○あづま 鎌倉幕府。  
○うきな よから  
△がな  
△なむ  
●いみじけれど  
●ひどくきまりがわるいけれど。



○憚り はゞかり  
つゝしむべきこと  
●えうなきもの  
どうなつても構は  
ないもの。  
○口さがなき悪  
しざまにいひふら  
す様子。  
○先坊 前の皇太  
子。  
○おとしめさまに  
劣つてあるやう  
に。  
○わく方なく「他  
統をまじへす」の  
御一統に「の意」  
○聞ゆる 敬意を  
あらはす助動詞。  
○程に 中に。  
○たゞびと 普通

せめて(甚だしく)思ひ餘りて、萬の憚りを忘れ、身をえうなきものになし果て。(十六  
夜日記)  
人の口さがなき、せめても(いたくも)先坊の御方さまの事を、おとしめさまに、いひな  
やまし、人々も。(増鏡)  
集りて入らむとすれど、せめて(非常に)、物の恐ろしかりければ。(宇治拾遺物語)

二七二 ぞう

「ぞく(族)」の音便で、「一族」「一類」「うから」「やから」の意。  
ひとつ御ぞう(御一族)のみ、今は、わく方なく、定り給ふべきかと、世の人も思ひ、聞  
ゆる程に。(増鏡)  
この御ぞう(一族)は、たゞびとにおはします。 (宇津保物語)

二七三 そこはか (辨言高麗)

これは、「はつきりしてゐること」「分明であること」「ごごそこ」など  
の意にいふ。

憚み給ふ御目、そこはか(はつきり)と見えす、ただ、日にそへて弱り給ふ。(源氏物語)  
そこはか(ごごそこ)と知りて行かねど、先に立つ涙ぞ、道のしるべなりける。(更科日  
記)

二七四 そこはかとなし (辨言高麗)

「そこはかとなし」「はつきりしない」「明らかなでない」「ぼんやりし  
てゐる」「ごごことなし」「何となし」など、物事のはつきり定まらない意  
にいふが、

四方の楯、そこはかとなう(ぼんやりと)煙りわたれる。(源氏物語)  
そこはかとなく(何となく)、御憚など重るやうにて、失せ給ひにけるとぞ聞えし。(増鏡)  
そこはかとなき(はつきりしない)外山のたいすまひも、月影に、もてはやされて、やう

な人。

○しるべ 道案者。

●外山 端近い山。  
●たいすまひ 有  
●はつきり 有  
●もてはやされて  
●照り映やされて。



○よしなしこと  
つまらぬこと。

く現れ行きぬ。(村田春海)  
心にうつりゆくよしなしことを、そこはかとなく(何となく)書きくれば。(徒然草)

二七五 そこら

これは、通常、(1)「その邊」「そのあたり」「そこいら」などいふ外に、「こゝら」といふ語と同義で、(2)「數多」「多く」「澤山」などいふ意味にもつかはれる。

帝よりはじめ奉りて、そこら(多く)の人、涙おとし給ふ。(宇津保物語)

そこら(數多)参りしつはものどもも、まがづれば。(増鏡)

蝦夷の人に飯を與へしかば、いと喜びながら、そこら(多く)食ひこぼしてけり。(松平定信)

二七六 ぞとよ

これは、「ぞ」に「とよ」を添へたものだけに、「ぞ」よりも意味が、一層

△ながら  
△てけり

強く、「ぞ」「ぞよ」「ぞ思ふよ」「であるよ」「であらうよ」といふやうな意味になる。

乙若が、船岡にて、よく言ひしものなと、汝等も、思ひ合せむするぞとよ(思ひ合せることであらうよ)。(保元物語)

天徳寺、驚きて、「只今までは、各々を、たのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、力を落したるぞとよ。(力を落したのであるよ)。(湯淺常山)

△ものを

二七七 そのかみ (船等、海軍兵)

「其の上」で、(1)「その折」「その當時」の意で、

一人は足をとらへ、今一人は手をとらへて死にけり。そのかみ(その折)、親、いみじくさわきて。(大和物語)

賴朝、某に下れと候ふは……そのかみ(その當時)、扶助せし勞を報ぜむとのことあるべく候。(室鳩巢)

○いみじく  
しく。 甚だ



○いそのかみ「ふるにかゝる枕詞。」  
△△かな  
△なべてすべて。

○あらしをある  
まいのに。  
○など 何故に。  
△かな

△あへず

(2)「過ぎ去つたその當時」「その昔」「以前」の意にいふ。  
いそのかみ、ふるの社のそのかみ(その昔)のふるき心は今も忘れじ。(古今六帖)  
そのかみ(その昔)や、祈り置きけむ、春日野の同じ道にも、たづね行くかな。(大鏡)  
そのかみ(以前)に頼めしことの違はれば、なべて、昔の世にやかへらむ。(増鏡)

二七八 そぼつ

「濡つ」といふ字をあて、通常、(1)「ぬれる」「濡ふ」意にいふが、  
おもひやる人もあらしを、鶯の、など、春雨にそぼち(ぬれ)ては鳴く。(榮華物語)  
心にもあらで、そぼつる(ぬれる)袂かな。いかにいひてか、ほすべからむ。(萬葉集)  
又、(2)「雨がしめやかに降る」「そぼく降る」意にもいふ。  
はつ時雨、曇りもあへず降りそぼち(しめやかに降り)、心細くはありしかど。(蜻蛉日記)

二七九 そら (隠里七)

「空」又は「虚」の字をあて、通常、(1)「虚空」「天空」「天」などの意にいふが、場合によつて、なほ、いろくな意味につかはれる。

(2)「空模様」「天氣」「時節」などの意。

なほ冴ゆる嵐は雪を吹きまぜて、夕ぐれ寒き春雨のそら。(空模様)。(玉葉集)  
空(時節)寒み、花にまがへて散る雪に。(枕草紙)

(3)「方向」「場所」「道」などに關して、ぼんやりと、とりどめもないふ。

△△△あはれとも草葉の露やとはれまし、道のそら(道のほとり)にて、消えなましかば。(小大君集)

初雁の旅の空なる(旅に於いて)聲聞けば、わが身をおきて、あはれなるかな。(中務集)  
歸りけむそら(方向)も知られず、賤捨の山より出でし月を見しに。(後撰集)

天の下、安きそら(ところ)なく、山々寺々社々、御祈りひびきさわけど。(増鏡)  
(4)「うはのそら」「心が落ちつかないこと」「心がぼんやりしてゐること」

△△△あはれ  
△△△あましか  
△かな

○寒か寒いので。

●ひびき 評判し。



○よとで「夜外出て、夜間に外出すること」  
○なく「ぬ」の延。

○清み 清いので。  
△かな  
○べかなれ「よくあるなれ」の約。  
△けり  
●れたけれ にくらしい。

などの意。

わぎもこが、よとでの姿見てしより、心そら。(うはのそら)なり、つちは踏めども。(萬葉集)  
秋風は、身をわけてしも吹かなく、人の心のそらに(落ちつかなく)なるらむ。(古今集)

(5)「根、據のないこと」「推量で物事を判断すること」などの意。

から衣、うつ聲聞けば、月清み、まだ寝ぬ人を、そらに(推量で)知るかな。(貫之集)  
見てこそは定むべかなれ。そらには(根、據なくでは)いかでか。(落窪物語)

(6)「うそ」「いつはり」などの意。

聲立て、鳴くといふとも、時鳥、袂はぬれじ、そら音(いつはりのなき聲)なりけり。(拾遺集)

そられ(眠つたふり)したるこそ、いとねたけれ。(枕草紙)

裸にて、そら死(死んだふり)をして、路邊に臥せりければ。(今昔物語)

④「何となく」の意。

そら(何となく)恥しき心地して、ありきなども、し給はず。(源氏物語)

それは、そら(何となく)恐ろし。(増鏡)

二八〇 それに

これは、今日では、(1)「そのうへ」といふ意味に用ひられるが、古くは、なほ、(2)「然るに」「それなのに」の意に用ひられてゐる。

頭つきたまはぬほどは、殿上の膳盤に、人もつかず。それに(然るに)方弘は、豆ひとつもりなとりて。(枕草紙)  
尾張守になし給ひてけり。それに(それなのに)、尾張に下りて、國行ひけるに。(宇治拾遺物語)

二八一 たぐふ

「類ふ」又は「比ふ」の字をあて、自動は四段に活用し、④「そふ」「なら

○頭 藏人頭。  
△ほど  
○臺盤 食物を盛りたる盤を載せたる臺。  
△てけり



○寶子 縁側。  
○まゐる 「飲む」の敬語。戴く。  
○かはらげ 盃。  
△まし

○秋風の樂 盤渉調の樂の名。  
○しるべ 案内者。

○なべてならず 並々でない。  
○はかなき 一寸した。

ぶ、「伴ふ」「つれになる」「一緒になる」などの意になり。  
嵐の山の紅葉……吹きおろす松風にたぐひ(つれ)て、御前の寶子にて、御酒まゐるかばらけの中などに散りかゝる。(増鏡)

秋の葉の冬の嵐にたぐは(伴は)すば、風も紅葉もかひなからまし。(拾玉集)

他動は、下二段に活用し、②「そはせる」「ならばせる」「伴はせる」「つれにならせる」「一緒にならせる」「和する」などの意に用ひられる。

しばく松の響に、秋風の樂をたぐへ(松風の音に和して秋風の樂を奏し)。(方丈記)  
花の香を風のたよりにたぐへ(伴はせ)てぞ、鶯さそふしるべにはやる。(古今集)

〇二八二 たすまひ (御前高麗、各御覽)

「様子」「有様」の意にいふ。

水草のたすまひ(有様)までも、なべてならず。(狭衣物語)  
はかなき石のたすまひ(様子)も、たゞ、繪にかいたらむやうなり。(源氏物語)

二八三 たてまつる

これは、尊敬の意をあらはす動詞として、通常、(1)「まゐらせる」「さしかげる」「献上する」「進上する」などの意にいふが、轉じて、(2)「車や船などにお乗せ申す」「衣服などをお着せ申す」「冠などをかぶらせ申す」などの意とか、

夜の明けぬさきに、御舟に奉れ(お乗せ申せ)とて、例の親しき限り、四五人ばかりして奉りぬ(お乗せ申した)。(源氏物語)

又は、(3)「お乗りになる」「お着になる」「おかぶりになる」などの意とかにいふ。

御車に奉る(お乗りになる)とて、日頃、おはしましつる傍の障子に、書きつけさせ給ふ。(増鏡)  
錦の御鏡直垂といふものたてまつりて(お着になつて)。(同)

○親しき限り 親しい者だけ。  
△ばかり

○鏡直垂 大將が垂下に着る直垂。



○すなはち その時

●あて 伴うて。  
○けしき 様子。

○そのかみ その當時  
○いみじう ひどく

落ち給ふ、すなはち、冠を奉らで（おかぶりにならないで）。（宇治拾遺物語）  
それから、この語は、なほ、敬意をあらはす助動詞として、自分の動作が他へ及ぶ時に添へて、(4)「まゐらする」「申す」などいふ意につかはれる。

伊勢の御息所、生み奉りたる（お生み申した）御子の、なくなりけるが。（伊勢物語）  
夜に入りて、深草殿へ、あてわたり奉る（まゐらせらる）。（増鏡）  
あはれに、忍びがたき御けしきを、かなしと見奉りて（まゐらせで）。（同）

二八四 はどたどし

これは、通常、「はつきりしない」「たしかでない」「ぼんやりしてゐる」「おぼつかない」などの意にいふ。

そのかみの事は、いみじうたどくし（たしかでない）けれど。（増鏡）  
目も、たどくしく（はつきりせず）、今はおぼえ侍るを。（宇津保物語）

二八五 たどる

「辿る」といふ字をあて、通常、(1)「路に迷うて尋ね歩く」意味にいふが、又、(2)「さがし索める」意、

あやし、ひが耳にやとどる（さがしもとめる）を聞き給ひて。（源氏物語）  
學問といふことする人、多くは、たど、書にかきたることをのみ讀みならひて、今の現の眼の前にあることをば、さしもたどらす（さがしもとめない）。（萩原廣道）

(3)「知りたいと尋ね思ふ」「穿鑿する」「心を籠めて考へる」意などにいふ。

たどらむ（心を籠めて考へるであらう）人は、心得つべけれど。（源氏物語）  
思ひ出る頃ははかなし、我も人も、見しにはあらず、たどらる、（知りたいと尋ね思はれる）世に。（増鏡）

二八六 だに・さへ・すら

（各條）

△あやし  
○ひが耳 聞きち  
○現 現在。  
○さしも そんなに。

○はかなし かがひ



(1)「だに」は、事物の軽い方を舉げて、言外に、他の重い方を知らしめるに用ひられ、口語で「でも」「だけでも」「すらも」「さへ」「さへも」などの意になる。

いづれの人と、名をだに(だ)だけも(だ)知らず。(徒然草)

昔のことを夢にだに(すら)も(も)御覽ぜず。(平家物語)

この御子どもを、同じ方にだに(さへ)も(も)つかはさざりけり。(大鏡)

佛だに(さへ)よく書き奉らば、百千の家も出できなん。(宇治拾遺物語)

そして、これには、「も」がついて「だにも」となり、又、省かつて「だも」となることもあるが、この場合にも、意味は別にかはらない。

一夜をあかすほどだに(でも)も(も)旅騒となれば、ものうきに。(太平記)

夢にだも(でも)も(も)あふと見るこそ嬉しけれ、残りの頼み少けれど。(和泉式部集)

(2)「すら」は、口語で、「でも」「でさへ」「でさへも」などいふ意味に當り、或物事を指示して、他を類推させるに用ひられる。従つて、この

△なん

△や  
○言とはぬ。もの  
をいはない。  
○とふ。といふ。

△かも  
○きほふ。争うて  
散る。

語は、「だに」と意義用法が殆ど同じい。

鬼すら(で)さへ(も)も(も)都のうちと、糞笠を、ぬぎてや、こよひ、人に見ゆらむ。(朝恒集)

言とはぬ木すら(でも)も(も)妹と兄ありとふを、たゞ獨り子にあるが苦しき。(萬葉集)

(3)「さへ」は、一つの事物の上に、他の事物が添はる意味をあらはすもので、「までも」の意になる。

ますらをの弓末振りおこしかりたかの野邊さへ(までも)も(も)清く照る月夜かもし。(萬葉集)

嵐にさほふ木の葉さへ(までも)も(も)涙と共に乱れ散りつゝ、事にふれて、心ほそく悲しけれ

ど。(十六夜日記) (大正二、山口高商)

月日のゆくをさへ(までも)も(も)なげく男。(伊勢物語)

「だに」「すら」は、今日の口語に譯すると、「さへ」「さへも」などいふ意味になることがあるので、文語の「さへ」と混同し易い。併し、文語の「さへ」は、口語に譯すると、大抵、「までも」といふ意味になり、決して、「さへ」とか「さへも」とかいふ意味になることはないから、この



點に注意してゐたら、容易に紛れない。

二八七 たばかり・たばかり (小堀系南、海軍兵、陸軍士)

「たばかり」は「た謀る」で、「た」は接頭語である。通常、(1)「謀り欺く」「たます」の意にいひ、

某、たばかりで。(歎き謀つて、呼び出し候べし。(謡曲、春榮)

又、(2)「はかる」「思ひめぐらす」「計畫する」「思案する」「工夫する」意。

子安貝とらんとおぼさば、たばかり。(工夫し)申さん。(竹取物語)

同じ月の廿四日の曙に、いみじくたばかりで。(計畫して)かくろへ、あて奉る。(増鏡)

年月かけて、たばかりけん。(計畫した)心も、皆、水の泡と消え果て。(飯田武郷)

(3)「かたらふ」「相談する」「謀議する」意に用ひられる。斯かることなむあるな、いかがすべきと、たばかり。(かたらひ)給ひけり。(大和物語)

○いみじく 巧み  
○かくろへ 隠れ  
○あて 伴ひ  
△なむ

「たばかり」は、動詞がいひすわつて、名詞となつたもので、(1)「謀りあざむくこと」「謀計」の意、

この女のたばかり(謀計)にや負けんとおぼしめして。(竹取物語)

(2)「思ひ廻らすこと」「思案」「工夫」「計畫」の意などにいふ。

まことのおはしまし所を、さうなく、武家へ知らせじの、たばかり。(計畫)にやありけむ。(増鏡)

車持のまこは、心たばかり(思案)ある人にて。(竹取物語)

二八八 たぶ

「たまふ(賜、給)」と同じ語である。

佛の御弟子にさふらへば、佛のおろしたべ。(賜はれ)と申すを。(枕草紙)

殿、南面へ出でて、御簾より御覽するに、あさましくおぼしめして、御馬をなむたび(賜はり)ける。(宇治拾遺物語)

○おろし 神佛へ  
○おさへたる 供物の  
○あさましく 意  
△外に なる

○さうなく 容易  
に



△なむ

我が國には、かゝる歌なむ、神代より、神も詠みたび。(給ひ)。(土佐日記)  
畫つ方には來べし。それまでに、賣りてたべ。(給へ)。(松平定信)

二八九 たまふ

敬意をあらはす助動詞として用ひられる「給ふ」には、二通りある。その一つは、(1)他人の動作に關する動詞に添へて用ひられ、四段に活用するもので、「なさる」といふ意味になり、わかりきつてゐるが、

○釣殿 寢殿造りの廊の南端、池に臨んだ所にある屋  
○又の日 翌日。

釣殿に出て涼み給ふ。(なさる)。(源氏物語)  
又の日の暮つ方、歸り給ひぬ。(なまつた)。(増鏡)

他の一つは、(2)自分の動作に關する動詞に添へ、對話上の敬語として用ひられ、下二段に活用するもので、他の語に譯すると、「まゐらす」「申す」などいふ意味になる。

いかで尋ねむと、思ひ給ふる。(まゐらす)を。(源氏物語)

○まうで來つる やつて來た。

△なむ

まこと、そらごと、見たまへむ。(申さん)として、まうで來つるなり。(宇津保物語)

人々、のぞみ申すと聞きたまへ。(まゐらせ)て。(元輔集)

よくも、吾ながら、思ひたまへわかれぬ(思ひ定め申されぬ)程になむ。(増鏡)

二九〇 たむく・たむけ

「手向」の字をあて、「たむく」は、通常、(1)「神佛に幣物などを捧ぐる」意にいひ、

立田姫たむくる(幣を捧ぐる)神のあればこそ、秋の木の葉の幣と散ららめ。(古今集)

いみぢ葉を關する神に手向け(捧げ)置きて、逢坂山を過ぐる木枯。(千載集)

又、(2)「旅立つ人にはなむけをする」「餞別する」意にもいふ。

老いねとも、またもあむはと、行く年に、涙の玉を手向け(餞別にやり)つるかな。(新古今集)

△かな

○木枯

△かな

「たむけ」は、この動詞がいひすわつて、名詞となつたもので、(3)「神佛



○たいまつらす  
「たてまつる」の音便。

○渡つ海 海。

○千尋の神 海神。

○追風 追ひざま

に後より吹き来る

△なむ

○あだ人 うはき

△なむ

に幣物を捧ぐること」「神佛に捧ぐる幣物」の意。

漕ぎ来る道に、手向する（祠佛に幣物を捧ぐる）所あり。梶取して、幣たいまつらすに。

（土佐日記）

渡つ海の千尋の神に手向する（捧げる）幣の追風やます吹かなむ。（新千載集）

(4)「旅立つ人にやるはなむけ」「餞別」の意。

あだ人の手向（餞別）に折れる櫻花、逢坂までは、散らすもあらなむ。（後撰集）

君がため祈りてたてるから衣、わかれの袖や手向（餞別）なるらむ。（續千載集）

(5)「峠（越えて行く山の坂路の頂上で、神に手向をするところからいふ）」の意などに用ひられる。

都出でて、朝たつ山のため（峠）より、露おきとめぬ秋風ぞ吹く。（拾遺愚草）

二九一 たらむ

（前北條大業、海軍兵、軍門）

これは、存在時又は進行時の助動詞「たり」の未然形「たら」に、未

來時の助動詞「む」が添はつたもので、存在的未来時とか進行的未来時とか、完了的未来時とかをあらはすに用ひられ、「……してあるたらう」「……してあろう」「……してをらう」「……したのであらう」などの意味になる。

常々、心にかけて、掃蕩したらむ（してあるたらう）座席と、俄に、蜘蛛のいとり、柱ふきたらむ（ふいたのであらう）とは、いがでか、見まがふべき。（梅園叢書）（明治四四、東北農大・大正四、海兵）

足の向きたらむ（向いたであらう）方へ行かむとす。（竹取物語）

二九二 たりき・たりけり

（各異綴）

これは、存在時又は進行時の助動詞「たり」に、過去の助動詞「き」又は「けり」を重ねたもので、存在的過去時とか、進行的過去時とか、完了的過去時とかをあらはすに用ひられ、「……してあつた」「……し

○蜘蛛のい 蜘蛛の巢。



△なむ

てゐた」「……してをつた」「……してしまつた」などの意味になる。  
扇は、……春風に、一もみ二もみ揉まれて、海へ、さつとぞ、散つたりける。(散つてしまつた)。(平家物語)  
その人、形よりは、心なむままりたりける。(ままつてゐた)。(伊勢物語)  
吾は久しく吉野の奥に住みたりき(住んでゐた)。

二九三 ちぎる・ちぎり

「契」の字をあて、「ちぎる」は、(1)互にいひかためる「契約する」「約束する」などの意にいふが、

○下紅葉 下葉の紅葉

契り(約束し) おきし山の木の葉の下紅葉、染めし衣に秋風ぞ吹く。(増鏡)  
契り(契約し) こし心の末は知られども、このひとことや、かはらざるらむ。(同)  
「ちぎり」は、この動詞のいひすわつて、名詞となつたもので、(2)互にいひかためること「契約」「約束」の意、

男も女も法師も、ちぎり(互にいひかためること) 深くて、かたらふ人の、未まで中よき事かたし。(枕草紙)

○かたみ 人を思ひ出す種となるもの。△ほど

ありあけの月をその夜のかたみにて、慰むほどの契(約束)だになし。(新續古今集)

(3)「前世からの約束」「宿縁」の意、  
契り(前世からの約束)ありて、此の世に又も生るとも、面かはりして、見もや忘れむ。(後拾遺集)

口惜しきちぎり(宿縁) 加はりける、前の世のみぞ、つきせず恨めしき。(増鏡)

(4)「ゆかり」「因縁」の意などにいふ。  
三年のちぎり(ゆかり) 絶えはて、ひとり留めて歸り上り給はむするにや。(平家物語)  
いまし埋火に問はむ……いかなるちぎり(因縁)ありてか、わが手には、ならさるいぞ。(清水濱臣)

○つきせず 非常に  
△にや 汝。  
○いまし 汝。  
○ならさる もちあつかはれる。

二九四 つ (各語訳)

これは、「て、つ、つる、つれ」と下二段に活用し、現在完了時をあら



△ものを

○かはらけ 盃。  
○いづらどちら。  
○さしとらせ  
しつけて取らせ

はす助動詞である。

花見にて出でにしものを、秋の野の霧に迷ひて、今日は暮しつ。(暮した)。(後撰集)  
藤の花我が待つ雲の色なれば、心にかけて今日もながめつ。(ながめた)。(續千載集)

○二九五 つい

これは、「つき」の音便で、動詞に添へて、その意味を強めたり、又は、「ちよつと」「そのまゝ」「だしぬけに」「俄に」などいふ意味をあらはす接尾語である。

船のところにて、ついでちて(立ちて)。(宇治拾遺物語)

汁物とりて、みなのみて、かはらけは、ついです。(そのまゝにす)つ。(枕草紙)  
いづらとて、ついかどまりて(ちよつとかがんで)、さしとらせ。(落窪物語)

○二九六 ついゐる

これは、(1)「かしまつてゐる」「つくばうてゐる」意味と、

御簾の前に歩み出でて、つい居(かしまつて居)給ふ。(源氏物語)

犬の柱のもとに、ついゐ(つくばうてゐ)たるを。(枕草紙)

(2)「そのまゝにゐる」「ちよつとゐる」「とまつてゐる」意とある。

あむちの木に、法師の上りて、木のまたに、ついゐ(とまつてゐ)て、物見るあり。(徒然草)

二九七 つきづきし

(高等、東文高麗、北給農大)  
實、仙臺醫學、東京女高師)

「附々し」で、「似あはしい」「似つかはしい」「ふさはしい」「相應してゐる」「調和してゐる」「工合がよい」「釣合がよい」などの意にいふ。  
家居のつきづきしく(何から何までよく調和して)あたまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。(徒然草)  
い、いれと、つきづきしう(工合よく)、日頃の志ありつるよし、聞えなし給ひて。(増鏡)

○あふちの木  
「棟」で、せんだんの木。

○あたまほしき  
さうあつてほしい  
と思ふ。  
○何くれ 何やかや。



○思ふどち 親しい友人。  
○茶點じて 茶をいれて。  
○心ゆく愉快な。

古き物を、圖をも、つきよくし。 (釣合よ)。おのれ造り出でて。 (本居宣長)  
思ふどちなど訪ひ來らむに、茶、點じてすめ、吾も飲みなどせむは、いと心ゆくわざにて、文人、歌よみなどのもてあそばむに、いと、つきづきしう。 (似あはしう) おぼゆ。 (村田春海)

二九八 つゝ (各語釋)

これは、完了の助動詞「つ」が重なつたもので、(1)一つの事をしながら、他の事をもする場合にいひ、「ながら」の意味になり、

火桶・菓物など、もて來つ。 (來ながら) かす。 (枕草紙)  
若君は、笑ひつゝ (ながら) 語り給ひき。

又、(2)同一の動作が繰返し行はるゝ場合にもいひ、「幾度も……して」「繰返し……して」「……してゐる」の意になる。

念じわびつゝ (こらへかれくして)、さまざまの寶物、かたはしより捨つるが如くすれど

○火桶 火鉢。

○あやにくに 意地悪くも。  
○白妙の雪が降つて、富士山にかけいつた枕詞。

も。(方丈記)  
あやにくにすゝみ出づる御涙を、もてかくしつゝ (おし隠し) おはします。(増鏡)  
田子の浦に、うち出て見れば、白妙の富士の高峰に雪はふりつゝ (降つてゐる)。(新古今集)

二九九 つとめて (東京大變)

「翌朝」「早朝」などの意である。

その夜はふげにければ、つとめて (翌朝)ぞ、殿に參らせ給へるに。(大鏡)

十七日、つとめて (早朝)、たつ。(更科日記)

九日、つとめて (早朝)、大湊より那波の泊をおはむとて、漕ぎ出でにけり。(土佐日記)

一夜もまどろまず居れば、つとめて (翌朝)は、倦み疲れて、物のやくにたす。(清水濱臣)

○おはむ その方に向つて行く。



三〇〇 ちつとも

「いささかも」「少しも」「ちつとも」「絶えて」などの意。

木の葉をかきのけたれど、つやぐ。(少しも)物も見えず。(徒然草)

くらははくらし、つやぐ。(絶えて)大政入道の孫とし知らず。(平家物語)

つやぐ。(いささかも)見も知らぬものどもを取りそなへたり。(宇治拾遺物語)

三〇一 つゆ (東京新聞、海軍共)

「露」で、通常、(1)水蒸気が冷氣にあうて、水滴となつたものをいふのであるが、又場合によつて、いろいろな意味に用ひられる。

(2)事物の數量の少いこと「僅かなこと」の意。

ぬれてほす山路の菊のつゆ。(僅か)の間に、いつか千年をわれはへにけむ。(古今集)

(3)「少しも」「ちつとも」「絶えて」「一向に」などの意。

年月経へても、つゆ(少しも)忘るゝにはあられど、去るものは、日々とうとしといへることなれば。(徒然草)

秋の夜に、聲も惜しまず鳴く虫を、つゆ(ちつとも)まどろまず、聞きあかすかな。(山家集)

(4)「はかないこと」「もろいこと」「消え易いこと」などの意。

露の(露)やうにはかない。命は消えやうで、この二年を送つて。(平家物語)

草の葉に、おかねばかりの露の(露)やうに消え易い。身は、いつ其の數に入らむすらむ。(後拾遺集)

(5)「涙」をたとへていふ。

我が袖は、草のいほりにあられども、暮るれば、露(涙)の宿りなりけり。(伊勢物語)

逢ふ夜なき親と子の、袖の露(涙)、こそ重たけれ。(曾我會稽山)

三〇二 じらし

これは、通常、(1)「堪へがたい」「難儀である」「苦しい」などの意にら

△かな

△ばかり

△けり



ふ外、②「つれない」「無情である」「氣強い」「氣にくはない」などの意がある。

△え……す  
○あはれ いたは  
しいこと。  
○さらに 一切。

つらき(つれない) 命の、今日まで待ることの恨めしきよしなど、えもいはず、あはれ多くて。(増鏡)  
一條院につくられたる一間の所には、つらき(氣にくはない) 人をば、さらによせず。(枕草紙)

三〇三 つれづれ (隨筆士、事門)

これは、①「つづく」と物思ひに沈むさま」の意と、

○しめやかに  
の静かに。

つれづれ(つづく)と打沈んで、物思ひ乱る、より外の事なし。(増鏡)  
いめやかに、つれづれと(つづく)と物思ひ沈んで、籠り居たれば。(同)  
②「ひまでたいくつなさま」「なすこともなくてさびしいさま」の意とある。

○日ぐらし 終日。

三〇四 つれなし (東家高麗小説、高麗、隨筆士)

「強情」の字をあて、①「氣強い」「情愛がない」「無情である」の意、

ことさらに、なまげなく、つれなき(氣強い)さまを見せて。(源氏物語)  
夢にさへ、人のつれなく(無情に)見えつれば、寝てもさめても、ものこそ思へ。(拾遺集)

②「そ知らぬ顔してゐる」「知らない風をしてゐる」意、

涙のうきぬべきを、つれなく(そ知らぬ顔して)もてなし給ふ。(増鏡)  
つれなく(知らない風をして)いふ下には、いかで、此の折、豈まんと思ひたばかるに。(宇津保物語)

③「少しも變らない」「平氣でゐる」意などにいふ。  
かくて、月日多くへて、思ひやる様、つれなき(平氣な)顔なれど。(大和物語)

●もてなし  
●つくるひ  
△いかで  
●たばかる  
●する

とり  
思案



●いたき にくら

若し、言ひ出づる事もやと待てど、聊か、何とも思ひたらず、つれなき(平氣である)が、いとねたきを。(枕草紙)

朝日影にほへる山の櫻花、つれなく(何の變りもなく)消えぬ雪かとぞ見る。(新古今集)

三〇五 てき・てけり

これは、完了時の助動詞「つ」の連用形「て」に、過去時の助動詞「き」  
「けり」を連ねたもので、完了的過去時をあらはし、「……してしまつた」といふ意になる。そして、「てき」の方は、純然たる過去完了の意味をあらはすのであるけれども、「てけり」の方は、多少、詠歎の意味を含んでゐることが多い。

花はなほ、うき世もわかず咲きてけり(咲いてしまつたわい)。都も、今や盛りなるらむ。

(増鏡)

岩間には、水の櫻うちてけり(うつてしまつたわい)、漏り來し水も絶えて音せず。(好忠)

集)

うた、寝に戀しき人を見てしより、夢てふものは頼みそめてき(頼みそめてしまつた)。(古今集)

三〇六 てむ

これは、完了時の助動詞「つ」の連用形「て」に、未來時の助動詞「む」が連なつたもので、完了的未來時をあらはし、「……してしまはう」の意になる。

梓弓おいて春雨今日降りぬ、明日さへ降らば、若菜摘みてむ(摘んでしまはう)。(古今集)  
櫻花、今日よく見てむ(見てしまはう)、吳竹の一よのほどに散りもこそすれ。(後撰集)

三〇七 とかく・とにかく

(東京高麗、山口高麗)

「左右」とか「兎角」とかの字をあて、(1)「かれこれ」「あちこち」「なにや

○てふ といふ。

○梓弓「おいて」  
にかけた枕詞。  
○おして 押通し  
△さへ  
○吳竹の「よ」に  
△かけた枕詞。  
△ほど



○程に 中に。

△めでたき

△かな

△さへ

○あへぬに……し  
きれないのに。

かや」「いろくくに」「さまふくに」などの意。

とかく(かれこれ)いふ程に、齡は年々に傾き、住家は、をりくくにせばし。(方丈記)  
何事も、めでたきためしには、先づ引かれ給ふ時なれば、とかく(何やかや)申すに及ばず。(無名草子)

霜枯の萱が下折れ、とかく(いろく)に、思ひ亂れて過す頃かな。(拾遺集)

(2)「何にせよ」「ごもかくも」「どにかく」などの意、

とかく(何にせよ)、此方の機嫌さへよければ、照しうござる。(狂言、茶盃拜)

三〇八 ところせし (北海道農大覽)

「所狭し」の義で、通常、1)「場所がせまい」「場所のせまい程である」「そこら一杯になつてゐる」の意にいふが、

五月雨の霽、いと所せき(そこら一杯に落ちてゐる)も、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて、めづらしくおぼさる。(増鏡)

露は……おくが上に、いやおきそひて、所せう(場所も狭いほど)こほれもあへぬに。(加藤千隆)

又、(2)「窮屈である」「面倒である」「氣がつまる」の意、

よろづ、所せき(面倒な)御ありさまよりは、なかく安らかに。(増鏡)

眠りなどのみしてと、とがむるも、いと所せく(窮屈で)。(枕草紙)

(3)「おもおもしろい」「ことごとしい」「仰山である」「大袈裟である」の意、

出で給ふ氣色、いと所せき(ことごとしい)を、人々、はしに出でて見奉れば。(源氏物語)

よろづに、清らをつくして、いみじと思ひ、所せき(おもおもしろい)さましたる人こそ。(徒然草)

(4)「困る」「もてあます」の意などにいふ。

常よりも、あつさ所せき(ひどくて困る)年にて、御前にも、なやましくおぼさるゝに。(狭衣物語)

三〇九 とかとぞとなり

○なかく 却つ

○氣色 様子。

○清ら 善美。

○いみじ すぐれてゐる。



○げにもなるほど。

○うれ、槍、  
○べらなる、やう  
である。

これ等は、他人から聞いたといふ意味をあらはすもので、未來、「どか  
いふ」「どぞいふ」「といふことなり」などいふべきを省略したもので  
ある。それで、何れも、「……といふことだ」「……ださうだ」「……と  
いふ話だ」といふ意味になる。

御心惑も暗れ給ひきとか。(といふ話だ)。(松平定信)

げにも、いひつる人もありにきとぞ。(といふことだ)。(同)

王業の久しからざる基なりとぞ。(といふことだ)。(神皇正統記)

涙とどめがたくして、物がたりとなり。(といふことだ)。(土田秋成)

三三〇 うち

「同士」「供」「仲間」「つれ」などの意。

見渡せば、松のうれごとに棲む鶴は、千代のうち(友)とぞ思ふべらなる。(土佐日記)  
おなじ心なるうち(同士)、いひあはせける。(増鏡)

三三一 とて

この助詞は、(1)「といつて」「と思つて」「として」などの意。

日頃は、大將とて(として)恐れ給ひけるが。(平治物語)

「あの信頼といふ不覺人は、臆したりな」とて(といつて)、日華門を打出でて、郁芳門へ向  
はれけるが。(同)

あさましきこととて(といつて)、人ども、來とぶらひけれど、睡がす。(宇治拾遺物語)

(2)「とても」「いづつても」「とも」などの意をにいふ。

そむくとて(とても)、雲には乗らぬものなれど、世のうきことぞ、よそになるてふ。(伊  
勢物語)

三三二 とばかり

副詞として用ひられるものは、(1)「暫くの間」「暫時」「ちよつとの間」  
の意にいふ。

△な  
○あさましきこと  
○大變なこと  
○とぶらひ訪ひ。  
○よそになるう  
とくしくなる。  
○てふ。「といふ」  
の約。



とばかり(暫時)ありて、戸おしあけて、さし出でさせ給へりける御顔は。(大鏡)  
義時、とばかり(暫くの間)打案じて。(増鏡)

それから、助詞の「と」「ば」を連ねて、前句のきれたのを受けて、②「そればかり」といふ意味をあらはす接續詞がある。

△△なむ  
△がな

今はたゞ、思ひたえなむ、とばかり(そればかり)を、入つてならで、いふよしもがな。(後拾遺集)

△まし

木の葉散る、とばかり(そればかり)聞きてやみなまし、もらで時雨の山廻りせば。(千載集)

〇 三三三 とぶらふ・とむらふ・とぶらひ・とむらひ

「とぶらふ」「とむらふ」は全く同義で、「訪ふ」の字をあて、(1)「おとづれる」「たづねる」「訪問する」「見舞ふ」などいふ意味に用ひられ、

〇山もと 山の麓

わが庵は、三輪の山もと、戀しくば、とぶらひ(たづね)來ませ、杉立てる門。(古今集)

かしこに小童あり。時々來りて、相とぶらふ(訪問する)。(方丈記)  
「とぶらひ」「とむらひ」は、この動詞が、いひすわつて、名詞となつたもので、(2)「おとづれること」「たづねること」「訪問」「見舞」などの意にいふ。

人人、絶えず、とぶらひ(見舞)に行く。(土佐日記)

女院の御住居、御とむらひ(訪問)の爲、法皇、是まで御幸にて候。(謡曲、大原御幸)  
それから、これと同じ読み方の語で、「弔ふ」「弔ひ」の字をあてる場合があるけれども、この方は、別に紛れないから、こゝには略する。

三三四 とまれ・とまれかくまれ・ともあれ

ともあれかくもあれ・ともかくにも

此等の語は、何れも同義で、「どうであらうと」「何にせよ」の意にいふ。



▷あやしく

○奉れ  
お乗りな  
され  
△がな

いかに見えつる御夢ならむと、あやしくおぼさるれど、人にもたまはず、とまれかくま  
れと(どうであらうと)、いよく御學問なぞ、せさせ給ふ。(増鏡)  
後ほともあれ(どうであらうと)、まづ、剃らば剃らしませ。(狂言、昆布布施)  
ともあれかくもあれ(何にせよ)、夜の明けはてぬまきに、御舟に奉れとて。(源氏物語)  
かくしつゝ、ともかくにも(何にせよ)ながらへて、君が八千代にあふよしもがな。(古  
今集)

三三五 ともかくともかくも

これは、「左右」又は「兎角」の字をあて、(1)「何れとも」「どちらとも」「何とも」なごの意と。

○程頃  
●あへしらへ  
○聞え 申し  
○程に から  
○程に から

物のつゝましき程にて、ともかくも(何れとも)あへしらへ聞え給はず。(源氏物語)  
(2)「何にせよ」「どうであらうと」「どうなりとも」の意とある。  
それならば、ともかくも(どうなりとも)致しませう程に。(狂言、呂連)

三三六 とも

「と思ふよ」の意である。

何事いふぞとよ(と思ふよ)。(源氏物語)  
夢かとよ(と思ふよ)見し面影も契りしも、忘れずながら現なられば。(新古今集)

三三七 とりのあと

「鳥の跡」で、(1)「鳥の足跡」のことにもいふけれども、古文によく出て  
来るのは、(2)「文字」とか「手蹟」とか「筆蹟」とかの意味である。これは、  
支那で、黄帝の時、蒼頡といふ人が、鳥の足跡を見て、文字をはじめ  
て作り出したといふ故事から来たものである。

まさきの鳥、ながくつたはり、とりのあと(文字)、久しくとまれば。(古今集序)  
鳥の跡(文字)のふるき例をも、よくわきまへ知れば。(村田春海)

△ながら

まさきの鳥「なが  
く」の序詞。



○心にくき所  
ゆかしく風情の  
ある所  
○仰書 貴人の仰  
せ言を書きしるす  
なふ  
△かは

○將曹 近衛府の  
主典  
○いろどり 著色  
彩色  
△めでたかり  
△けり  
○さえ 學問

それから、又、(3)「手蹟の拙いこと」にも譬へていふことがある。  
心にくき所へつかはす<sup>寄書</sup>仰書などを、誰も、鳥の跡などのやうに(手蹟拙く)は、など  
かはあらむ。(枕草紙)

三一八 とりざり

「取々」で、(1)「思ひく」、「各自」「それく」、「などの意と、

人々出でて見る、とりざりに(各自に)、物どもいひかはして。(枕草紙)  
近衛の將曹廿四人、とりく(それく)いろどりに織り盡したる、めでたかりけり。(増  
鏡)  
(2)「あれこれ」「いろく」、「などの意とある。  
とりく。(いろく)のさえども、ならひ給ふ。(源氏物語)  
奢れる事も、猛き心も、皆、とりく(いろく)なりしかども。(平家物語)

三一九 な

感動の意をあらはす助詞で、(1)感歎の意をあらはし、又は、念を推し  
ていひ、「わい」とか「よ」とか「なあ」とかの意味になる。

蟬の聲聞けば悲しな(悲しいわい)、夏衣、薄くや、人のならむと思へば。(古今集)  
泣くく宣ひしことは、忘れ給ひぬるな(お忘れになりましたなあ)。(平家物語)  
なべて咲く頃にしあれば、櫻花、かゝることばの色もそへじな(そへないよ)。(中務内侍  
日記)

三二〇 な・な……そ

動詞に添へて禁止の意をあらはす助詞で、單觸に用ひられる場合と、  
「な……そ」といふやうに、動詞を隔て、<sup>そ</sup>「そ」を添へる場合とある。  
夏山になくほとぎす、心あらば、物思ふ吾に、聲な聞かせそ(聲を聞かせてくれるな)。  
(古今集)  
男ども、なありきそ(歩くな)とて。(竹取物語)

△や  
○なべて おしな  
△し

○心あらば 思ひ  
やりがあつたら



龍の首の玉、取り得ずば、歸りくな。(歸つて來るな)と宣へば。(竹取物語)

かくな恨み給ひそ。(さう恨みなさるな)。(徒然草)  
妹があたり、わが袖振らむ、木の間より、出でくる月に、雲なたなびき(雲よ、たなびくな)。(萬葉集)

龍の首の玉、取り得ずば、歸りくな。(歸つて來るな)と宣へば。(竹取物語)

三三二 なかなか

(高等、東京高師、神戶高師、長崎高師、各院、東京高師、専門)

「中中」の字をあて、今日では、1「容易には」「どうして」「とても」の意とか、2「随分」「相應に」「可なり」「よほど」「頗る」「非常に」の意とかにいふけれども、古文では、普通、3「却つて」「けつく」の意にいひ、  
ひたぶるの世捨人は なか／＼(却つて)あたまほしき方もありなむ。(徒然草)  
はじめより終まで、説のかはれることなきは、なかなか(けつく)をかしからぬかたもあるぞかし。(本居宣長)

●ひたぶるのほんとの。たすらの。ほんとの。  
○あたまほしき方望ましいといふ。  
△なむ。  
○なかしからぬかた。面白くない。  
△か。

○いまだしき未熟な。  
△いみじき。

○ひがごと間違。  
○人とあらずは人間であらんよりは。

○桑子。蠶。  
○玉の緒ばかり。暫くの間。

○尾籠。「をこのあて字で」「愚」の意。

△ほど。

○たとへなく。たとへやうもな。

いまだしき學者の、心はやりて、いひ出づることは……多くは、なか／＼(却つて悪いやう)なる、いみじきひがごとのみなり。(同) (大正三、東京高師)

又、④「なまなか」「なまじひ」の意にも用ひられてゐる。  
なかなか(なまじひに)人とあらずは、桑子にも、ならましものを、玉の緒ばかり。(萬葉集)

なかなか(なまなか)申さむも尾籠なりと存じて、心勞せしほどに。(源平盛衰記)

三三三 ながむ

「眺む」で、今日では、(1)「見渡す」「遠く望む」の意にいふが、もとは、(2)「つく／＼と見る」「じつと見つめる」「物思ひなどしてうちまもる」「物思に沈んでじつとしてゐる」などいふ意味で、古文には、よく、この意味であらはれて來る。  
たといへなく、ながめ(物思ひに沈んで、ぼんやりとうちまもり)しなれさせ給へる夕暮



△いみじう  
○あかしわびて  
月日を過しかね  
て。  
△いかに

に。(増鏡)  
故郷に、ひとり、いみじう心ほそく悲しくて、ながめ(物思ひに沈んで)あかしわびて、  
久しうおとつれぬ人に。(更科日記)  
はるくと行先遠く暮はれて、いかに、そなたの空をながめむ(じつと見つめよう)。(十  
六夜日記)

三三三 ながむ (東京高麗)

「詠む」の字をあてる場合には、「長く、聲を引いて、詩歌等を吟ずる」「吟  
誦する」「詠ふ」「詠ずる」などいふ意に用ひられる。  
忍びたる聲にて、「淀のわたりのまだ夜ふかきに」と、ながめられ(詠はれ)たりし。(十  
訓抄)  
「こぼれてにほふ花櫻かな」とながめ(吟じ)ければ。(今昔物語)

三三四 ながら (高麗)

接續詞の場合には、「乍」の字をあて、「とはいへど」「けれども」「けれども」では  
あるが「だけれど」「だが」などの意になる。

冬ながら(とはいへど)空より花の散り来るは、雲のあなたは、春にやあるらむ。(古今  
集)  
昔男ありけり、身は賤しながら(けれども)、母なむ、宮なりける。(伊勢物語)

三三五 ながら

接尾語の場合で、「隨」の字をあて、(1)名詞や動詞などについて、「その  
まい」「それなりに」の意、  
御簾の内ながら(にゐるまいで)、のたまふ。(源氏物語)  
都にありながら(あるまいで)、この歌を出さんこと、念なしと思ひて。(古今著聞集・十訓  
抄)  
かくなからは(斯うしてお別れしてゐるなりでは)、死出の山路も、越えやるべうも侍らす

△△にや  
△△けり  
△△なむ  
○宮 皇女。

○念なし 残念で  
ある。  
●死出の山路も越  
えやるべうも侍ら  
ず 死んでも死に  
きれませぬ。「べ  
う」は「べく」の音  
便。  
△なむ



△すべて  
○なかし  
面白。

△なむ。  
なむ。(増鏡)

- (2)「共に」「一緒に」「あはせて」「ごめに」「ぐるみに」の意、すべて、折につけつゝ、一年ながら(ぐるみに)をかし。(枕草紙) とりあへぬ早苗の末の亂れ葉に、村雨ながら(と一緒に)さわぐ夕風。(夫木集)
- (3)「……すると同時に」「つい」「かつ」の意などとなる。 疑ひながら(つゝ)も念佛すれば往生す。(徒然草)

三三六 なく

打消の助動詞「す」の活用たる「ぬ」の延びたものである。

深山には松の雪だに消えなく(ぬ)に、都は野邊の若菜つみけり。(古今集) 櫻花散らば散らなむ、散らすとも、古里人の來ても見なく(ぬ)に。(同)

△△△  
△なむ

三三七

なごり

(高等、各高麗、小高麗、水産、千葉野草、北高次、専門)

△し  
●としも  
やまししく思ふわ  
いしも  
△きりて曇りて。  
朦朧として。

△ばかり  
●いみじう  
にうまく  
△にや  
○ねんごろに  
心をこめて。手厚

この語は、元來、(1)「海邊で、波の引いた後に、なほ、そこらに残つて かる水」とか、(2)「風がないした後、なほ、暫く波が静まらないこと」と かにいひ、「餘波」の字をあてるが、

難波瀧 潮干のなごり(残れる水)あくまでに、人の見る子を、吾しとしも。(萬葉集) 風しも吹いたれば、なごり(餘波)しも立てれば、みな底きりて、その玉見えす。(催馬 樂)

更に、これから轉じて、「名残」の字をあて、(3)「物事の過ぎ去つた後、 なほその氣の残つてゐること」「残つたけはひ」「餘勢」「餘情」「餘韻」「餘澤」の意、

はや、雨も數ふるばかりに、川の面に見ゆる頃、夕月のことさらに、新しくみがき出でた れば、はや、雨のなごり(残つたけはひ)もなし。(松平定信) 今まで、國のあるじにて、世をいみじう治めさせ給へりける名残(餘澤)にやあらむ、 いとねんごろにのみ、つかうまつれり。(増鏡)



○さすがに いかにか  
△や

△を

○さすがに いかにか  
○など 何故に。  
○しら川 白川といふ地名に「知ら」といふ語をいひかけてある。

夏のなごり(餘勢)、又もたちかへりて。(清水濱臣)

(4)「別を惜しむこと」「残り惜しく思ふこと」「別れても心に忘れかねること」「別れてからの追慕の情」「別るゝ前の惜別の情」の意、

心強くはのたまひしかども、さすが、名残(別れてからの追慕の情)や惜しかりけむ、また歸りて。(保元物語)

童の法師にならむとする名残(別を惜しむ)とて、各、遊ぶことありけるに。(徒然草)

(5)「残り」「残餘」の意、

なごり(残り)なく燃ゆと知りせば、皮衣、おもひのほかにも、おきて見ました。(竹取物語)

(6)「わかれの最後」「訣別」「最終」「記念すべき最終のもの」「最終の記念」の意、

晦の夜、……曉かたより、さすがに音なくなりぬこそ、年のなごり(最終の記念)も心ほそけれ。(徒然草)

馴れくして見しはなごり(記念すべき最終)の春ぞとも、など、しら川の花の下陸。(新古今集)

古今集)

(7)「子孫」「後裔」の意などにいふ。

かの維時が名残(子孫)は、ひたすらに、民となりて。(増鏡)

この高氏は、いにしへの頼義朝臣の名残(後裔)なりければ。(同)

三三八 なさけ (多摩、喜門)

「情」の字をあて、場合によりて、いろ／＼な意味につかはれる。

(1)「人情を解する心」「ものゝあはれを知る心」「あはれみ」「親切氣」「同情心」「人情」などの意、

この大臣、入道殿よりは、少しなさけ(人情)おくれ、いちはずやくなど、おはしければ。(増鏡)

かゝらずば、とまる心もありなまし、うきぞこの世のなさけ(ものゝあはれを知る心)なりける。(玉葉集)

○ひたすらに。一むきに。全く。

△大臣  
○おくれ 薄く。  
○いちはずやく 心  
●いちはやく 心  
●鋭く。はしこく。  
△まし



○預なりけるもの  
 預つてゐるもの  
 ●心ばへ心ばせ  
 氣だて  
 △や  
 ○東のひしめきの  
 まぎれに 鎌倉滅  
 亡の騒ぎにまぎれ  
 て  
 ○つれないき 情愛  
 のない

- (2)「趣味を解する心」「風流心」「風雅な心」などの意。  
な。さ。げ。(風流心)ある人にて、瓶に花をさせり。(伊勢物語)
- (3)「風情」「趣」「趣味」「興味」「感興」などの意。  
心うつるな。さ。げ。(趣)いづれとわかかれぬ。花ほととぎす。月・雪の時。(玉葉集)

三二九 なさけなし (鑑)

「情無し」で、通常、(1)「あはれみの心がない」「思ひやうがない」「人情がない」「同情がない」「無情である」などの意にいひ、  
 季房の宰相入道のみぞ、預なりけるもの、情なき(無情な)心ばへやありけむ、東のひしめきのまぎれに、失ひてければ。(増鏡)

又、(2)「つれない」「氣強い」「すげない」「無愛想である」などの意。  
ことさらに、なさけなく(氣強く)つれないさまを見せて。(源氏物語)

(3)「あさましい」「興がさめる」「面白くない」「いやである」などの意。

●あぢきなく 面白くない  
 △ばや  
 ○常夏 罹麥の異名

●あだ人 浮氣な人  
 ○時どくものから  
 時には拘はらない  
 もの  
 ○雲の上人 禁中  
 にあて地位のある  
 人  
 △△ものし  
 △△べし

哀になさけなき(面白くない)世も、今さら心うし。(増鏡)  
 寺やかれ侍りしかば、なさけなく(あさましく)あぢきなく。(撰集抄)

(5)「趣味を解しない」「不風流である」「無骨である」などの意にいふ。  
なさけなき(趣味を解しない)人に見せばや、をりふしを、すぐさす咲ける常夏の花。(新撰六帖)

三三〇 なたたり

これは、ラ行變格に活用する自動詞で、「名高い」「有名である」「評判で世に知られてゐる」「その名が世に聞えてゐる」などの意にいふ。  
世の中に、なたたり(その名が聞え)給ひつるあだ人の。(宇津保物語)  
名だたる(名高い)高嶺は、時どくものから、つぎて降りしく大雪に。(橋守部)  
歌よむものは、雲の上人ならば、いつも、名だたる(有名な)人のやうに覺えて、拙き歌をも寫しものして、詠ぶもあるべし。(松平定信)



△なく  
○門させり。門を  
閉ぢてある。  
△なく  
●いでがてにする。  
出でにくする。  
○そぼつる。ぬれ

これ等は、何れも、同義の副詞で、「何故に」「なぜ」「いかなれば」「どうして」「なんだつて」などの意になる。

三三一 なご・なごか・なごて・などや (高等、陸軍)

宿りせし花櫛もかれなく<sup>△△</sup>、など<sup>△△</sup> (なご)、ほととぎす、聲たえぬらむ。(古今集)  
うき世には、門させりとも見えなく<sup>△△</sup>に、などか<sup>△△</sup> (いかなれば) わが身のいでがてにする。  
(同)

朝氷、とくる間もなき君により、などて<sup>△△</sup> (どうして) そぼつる袂なるらむ。(拾遺集)  
生野こそ、いくかひなくて歸されめ、などや<sup>△△</sup> (なんだつて) 近江のあふ人のなき。(頼政集)

三三二 なゝめ・なのみ

「斜」の字をあて、いろ／＼な意味があるけれども、古文によく出て来て、わかりにくいのは、1)「普通」「一通り」「並々」「きはだたない」

△△心うし  
△なり  
○片ほ  
△だに  
未熟。

「よいかげん」「なほざり」なごいふ意である。

御心にもあらで、ひかされおはします程に、心うしといふものなり。(つらいなどいふも一通りのことで、つらさは、いはんかたもない。(増鏡)  
なゝめに(よいかげんで)片ほなるだに。(芳風俗)

三三三 なゝめならず・なのみならず

「一通りならず」「並々ならず」「一方ならず」「甚だしく」「非常に」「ひどく」などの意。

勢のつくことなゝめならず。(一通りでない)。(平治物語)  
この人の御あはれ、いとままさり、こゝろ苦しさをなのみならず。(並大抵ではない)。(濱松中納言物語)

三三四 ななり

○あはれ  
しいこと。  
いたは



「なるなり」の約つたもので、「である」「であるのだ」「であります」「であるのです」の意。

○得意 ひいきにする人。

されば、天狗なり。(であるのだ)とて。(宇津保物語) 必ず見せさせ給へ、御得意なり(であります)。(枕草紙)

三三五 ななむ

「なるなむ」の約つたもので、「であつてほしい」「してほしい」したものだ」などの意。

○春ながら 春であるまいで。

年の中は、皆春ながら暮れなむ(てほしい)。花見てだにも憂き世すまむ。(拾遺集)

三三六 なにおふ。なにしおふ

「名に負ふ」は、(1)「……といふ名を持つてゐる」「名として負ひ持つ」「名のる」といふのが本義であるが、

○たちかへり 昔にたちかつて。 ○とふ といふ。

花橋は名にこそおへれ(昔のことを思ひ出さるといふ名を持つてゐるが)、なほ、梅のほひにぞ、いにしへの事も、たちかへり、戀しう思ひ出でらる。(徒然草) これやこの名におふ(名として負ひ持つ) 鳴門の渦潮に、于藤刈るとふ海人少女ども。(萬葉集)

又、轉じて、(2)「名高い」「有名である」「評判が高い」「音に聞ゆる」「かねて聞いてゐるその名にたがはず」「その名に背かず」「評判の通り」などの意にもいひ、「名にし負ふ」も、亦、この意味に用ひられる。

△や ○梅の花笠縫ふて ぶ鳥 鶯をいふ。 古今集に「鶯の花に縫ふてふ梅の笠、折りてかささむ老かくるや」とあるによる。 △いざ △や

花は津の春なれや、名におふ(名高い)梅の花笠縫ふてぶ鳥の翼には。(謡曲、藤刈) いにしおはば(かねて聞いてゐる都鳥といふ名に、違はなかつたら)、いざ、こと問はむ、都鳥、わが思ふ人は、ありやなしやと。(古今集)

三三七 なべて (小徳高僧、陸軍士)

「並べて」で、(1)「おしなべて」「ひさくるめて」「すべて」「一般に」「



△にけり  
△にや  
○祭 賀茂祭。  
○今めかしよう  
と改まつて。  
△にや

●更に 少しも。  
○しるし 効驗。  
○たくみ 職工。  
大工。

切「悉く」「皆」などの意と、

なべて(すべて)物知らぬたぐひは、上古の神鏡は、天徳長久の災にあひ、草雉の寶鏡は、海に沈みにけりと、申し傳ふ事侍るにや。(神皇正統記)

祭の頃は、なべて(悉く)、今めかしよう見ゆるにやあらむ。(堤中納言物語)

(2)「尋常一樣」「普通一般」「並一通り」「並々」「通常」などの意とある。

さまぐの御祈はじまりて、なべて(並一通り)ならぬ法ども行はるれども、更に、その  
いるしなし。(方丈記)

三三八 なほ

「尙」又は「猶」の字をめて、(1)「やはり」「それでも」「まだ」「もとのやうに」「いまだに」などの意。

○むつましき  
つかしい  
△かな

いかにせん、たのみ陸とて立ちよれば、なほ(やはり)袖ぬらす松の下露。(太平記)

三三九 なまめかし・なまめく

「生めかし」「生めく」で、兩語とも意義同じく、(1)「若々しい」「みづみづしい」「若々しく美しい」「華かで美しい」意。

いと若う清げなる十餘人ばかり物語りして、いとなまめかしげ(華かに美しさう)なり。(落窪物語)

肩の宮、御心限りなくなまめき(若々しく美しい様子)給うて。(伊勢集)

(2)「奥ゆかしい」「上品である」「優美である」「閑雅である」「品位がある」意。

○清げなる  
美し  
△はかり  
△なり



○七夕祭る 七月  
七日の夕を牽牛織  
女の二星を祭る  
△△すべて  
△△や  
△△清げ

△あな  
○かしまし  
るさい  
う

七夕祭るこそ、なまめかしけれ(優美である)。(徒然草)  
△△すべて、神の社こそ、捨てがたく、なまめかしき(奥ゆかしい)ものなれや。(同)  
かたち清げに、心なまめきたる(閑雅である)こと限りなし。(宇津保物語)  
(3)「あだつばい」「色めかしい」「媚ぶる様子がある」「しなをつくる」「艶つばい」意などにいふ。  
秋の野に、なまめき(色めかしい)立てる女郎花、あな、かしまし、花も一時。(古今集)  
今より、なまめかしう(あだつほく)はづかしげにおはすれば。(源氏物語)

三四〇 なむ (なん)

これには、三通りある。

(1) 現在完了時の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、未來時の助動詞「む」の添はつた、完了的未來時の助動詞で、「であらう」「……てしまはう」の

意となり、完了的未來時をあらはし、又は、未來を想像する意にいふ。但し、これは、動詞の連用形につく。

○あだし心 他心  
○かてらに かた  
がたい

○程なく 同しな  
く。

君をおきて、あだし心を我がもたば、末の松山波もこえなむ(こえるであらう)。(古今集)  
わが宿の花見がてらに來る人は、散りなむ(散りはてであらう)。後ぞ、戀しがるべき。  
(古今集)

(2) 動詞の未然形について、願望又は希望の意をあらはす助詞で、「……してほしい」「……であつてほしい」「……したいものだ」の意となる。

夏の夜の月は程なく入りぬとも、やどれる水に影はとめなむ(とめてほしい)。(後拾遺集)  
人知れず思ふ心は、春霞、たちいでて、人の目にも見えなむ(見えてほしい)。(古今集)  
生れ出でし身はひくけれど、學びには、千萬人の上に立たなむ(立ちたいものだ)。(平田篤胤)

(3) 物事を指示するときにいふ助詞で、「ぞ」に似てゐるけれども、意味



が少し弱い。そして、この語が上にあると、下を連體形で結ぶのが常である。

その人、かたちよりは、心なむ(の方)まさりたりける。(伊勢物語)

心へだてぬどちのまどあは、なべて、うちとけたるなむ(が)よきを。(本居宣長)(明治三七、水産)

柿の本の人丸なむ(が)歌の聖なりける。(古今集序)

この助詞は、ごうかすると、下に來る結びの詞を省略することがある。いと、やむことなむ(ある)貴いのである。(増鏡)

さのみは、うるさくてなむ(書きつる)うるさいので省いた。(同)

三四一 なめり

「なるめり」又は「なむめり」の約つたもので、「であるやうだ」「らしく見える」の意。

子になり給ふべき人なめり(であるやうだ)とて。(竹取物語)

三四二 ならし

「なるらし」の約つたもので、通常、(1)「であるらしい」「であらう」の意にいふが、

新しき年のはじめに、豊の年、いるすとならし(のであらう)雪の降れるは。(萬葉集)

又、轉じて、(2)「なり」と同様に、「である」といふ意にもいふことがある。

もとめ否みがたく、いさゝか、蛇足の書きそふるものならし(ものである)。(萬葉集)かの老女と夜もすがら問答したることを記して、後の語り草とするものならし(ものである)。(神學納涼問答)

三四三 なり (名譽)

○しるす 前兆を示す。

○蛇の足 餘計なこと。無駄なこと。○夜もすがら 夜通しに。

△ける 同士。○どち 團樂。○まどあ 團樂。○なべて すべて。△ける すべて。○やむことなく 貴く。



○すさみ 慰み。

○とぶらはむ 訪はむ。  
○苔の袂 僧衣。  
△だに

これは、「にあり」の約つたもので、元來、(1)物事を指定したり、又は、説明したりするに用ひられ、「である」といふ意になるが、雪にのみ我が心を寄するも、所に隨ひ、人によりたる、老のすさみなり(である)。(村田春海)

新なる説を出すは、いと大事なり(である)。(本居宣長)

又、轉じて、(2)叙述を確めるといふ風に用ひ、餘情を含ませて、詠歎の意になることがある。この場合には、大抵、「わい」と譯すればよい。

秋の野に、人まつ蟲の聲すなり(するわい)、われかと行きて、いざとぶらはむ。(古今集) 皆人は花の衣になりぬなり(なつたわい)、苔の袂よ、かばきたにせよ。(同)

三四四 にき・にけり (各書)

現在完了時の助動詞「ぬ」の連用形「に」に、過去時の助動詞「き」「けり」

がつき、又は、存在時及び進行時の助動詞「たり」の、過去時の助動詞として代用せられたものがついたもので、完了的過去時をあらはし、「……してしまつた」の意味になる。

天下の民、ほとく塗炭におちにき(おちてしまつた)。(神皇正統記) (明治四〇、海軍機關・明治四四、新瀉醫學專・大正三、水産)

胸の内心地よく、終に、その病癒えにけり(癒えてしまつた)。(松平定信)

彫りつけむ文字やうも、その名と共に、消えはてにけり(はてしまつた)。(井上文雄) (明治四二、高師)

三四五 にて (各書)

助詞の「に」と「て」との間に、他の語が省略せられたもので、「にありて」「にありて」「に於いて」「になして」などの意をあらはす。従つて、口語では、「であつて」「によつて」「で」「にして」などの意になる。

○塗炭 泥にまみれ火に焼かるやうに非常に苦痛な境遇。  
○文字やう 文字の格好。



月影を、色にて（にして）咲ける卯の花は、あけば、有明の心地こそせめ。（後拾遺集）  
心あてに見し白雲は霞にて（であつて）思はぬ空に晴る、富士のれ。（村田春海）（大正元、山口高商）

我が心にて（で）、我が身の上は、はからひにくきぞ。（平家物語）

三四六 には

「庭」の字をあて、通常、(1)「邸内又は階前の平地」とか、(2)「草木・築山・泉水など設けた處」とかの意にいふが、又、(3)「物事を行ふ場所」の意や

軍のには（戰場）に出でて。（源平盛衰記）

忽ちに、そのには（場所）に射ふ事はえせず。（宇治拾遺物語）

(4)「波の静かにないでゐる海面」の意などにいふ。

漕き出でむには（ないでゐる海面）も静けし。（萬葉集）

△え……す

三四七 にはふ・にはひ

「にはふ」は、「匂ふ」の字をあて、今日では、(1)「香氣が立つ」「かゝる」の意にいふが、古文では、この他、(2)「光澤があつて美しい」「つややかである」「艶麗である」「美しい色彩があらはれる」の意、

春は藤波を見る、紫雲の如くにして、西の方ににはふ（美しい色艶で咲く）。（方丈記）

蓮葉の濁に染ますして、花ならで、夕風ににはひ（吹き靡かされて、つややかにそよぎ）

わたるも、異草にすぐれたり。（貝原益軒）

いさしまの大和心を人とはゞ、朝日ににはふ（映じて艶麗に咲いてゐる）山櫻花。（本居宣長）

色は波ににはひ（映じて美しい色彩があらはれ）、聲は雪になんすみにける。（賀茂真淵）

(3)「光る」「勢ひづく」「活氣づく」「光彩が生ずる」「生々して来る」の意、

にはひ出でて（活氣づいて）宮の内、やう／＼人目見え。（源氏物語）

○藤波 藤の花の波に見たて、いつたもの

○しきしまの 大和にかゝる枕詞

△なん



○ほど。頃。  
○おほえて。のや  
うに見えて。

○草枕 旅の枕詞。  
△かも

○おとなひ 音を  
たてること。

○おはれ 趣。

△△なむ

○おはれ 趣。  
○おはれ 趣。

○おはれ 趣。  
○おはれ 趣。

○おはれ 趣。  
○おはれ 趣。

○おはれ 趣。  
○おはれ 趣。

△なむ

○三衣 三枚重ね  
て着るなむ。

○五つ 五衣で五  
枚重ねて着るなむ。

○指貫 裾を糸に  
て足に括りしめて

はく袴。

○めでたき 立派

なり。

○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

(4)「くまごつてある」「ぼんやりと光がさす」「ぼかしてある」「朦朧と  
してゐるの意、  
月の出づるほど、曙の空おほえて、横雲のたなびきたるに、やゝにほひ（ぼんやりと光が  
さし）初めたれど。（松平定信）（大正六、高等）

(5)「色に染まる」「意などにいふ。  
草枕、旅行く人も行き觸れば、にほひぬ（色に染まつた）べくも咲ける萩かも。（萬葉集）

「にほひ」は、普通、(6)「香」「かをり」「香氣」などいふ外に、(7)「光」「威  
光」「氣韵」「色彩」「風情」「趣」などの意、

露のにほひ（風情）風のおとなひ、いづれ、あはれを添へざるなむなかりける。（村田春  
海）

日頃は、何の御にほひにもふれず、（御威光にも接しない。御側にも寄りつけない）數なら  
ぬ人。（増鏡）

空清く晴れたる日、日影のますかたより見たるは、にほひ（色彩）こよなくて、同じ花と  
もおほえぬまでなむ。（本居宣長）

(8)「くまごつてあること」「ぼかすこと」「ぼんやりと光がさすこと」の  
意、

紅のにほひ（くまごつてある色目）の三衣。（増鏡）

紫のにほひ（ぼかしてある色目）五つに。（同）

(9)「華やかであること」「光澤があること」「艶麗であること」の意、

織物の御指貫、いとめでたき御にほひ（艶麗なる様子）なり。（増鏡）

あてに、にほひ（艶麗）みちて、らうたく見え給ふ。（同）

(10)「色に染まること」の意などにいふ。

わが待ちし秋萩咲きぬ、今だにも、にほひ（色に染まり）に往かな、をちかた人に。（萬葉  
集）

○三衣 三枚重ね  
て着るなむ。

○五つ 五衣で五  
枚重ねて着るなむ。

○指貫 裾を糸に  
て足に括りしめて

はく袴。

○めでたき 立派

なり。

○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。

○あて 上品。  
○あて 上品。



助詞の「に」に疑問の意を示す「や」が添はつたもので、下に來る語句を省いて、文の結につかはれ、「であらうか」「であつたらうか」などの意になる。

八月の十日あまり六日にや。(であつたらうか)、秋霧にをかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。(神皇正統記)  
頭の上に、何にかあらむ、いと冷かに散りくるは、雪降り出でたるにや。(のでもあらうか)と思ふほど。(中島廣足)

三四九 ぬ (各書)

「ぬ」には、(1)現在完了時をあらはし、「……た」の意になるものと、  
花散りぬ。(散つた)。都へ歸るべきになりぬ。(なつた)。(東關紀行)  
「おもひ寄らぬ、おろかなる雨かな」と、怒り罵るもありぬべし。(あつたであらう)。(松平定信)

△ほど

△△かな  
△べし

△ながら  
△けり

○葦の丸屋 葦で  
ふいた假屋。  
○こよなくて  
の上もなくて  
△なむ

(2)打消の助動詞「づ」の連體形たる「ぬ」で、「……ない」の意になるもの  
とある。

夜の明けぬ。(ない)前に勝負は決すべし。  
磯なれぬ。(ない)心ぞたへぬ。(ない)旅寝する葦の丸屋にかゝる白浪。(新古今集)  
にほひこよなくて、同じ花とおぼえぬまでなむ(思はれないほどである)。(本居宣長)

三五〇 ね

希望の意をあらはす助詞であるが、語氣は、命令に近く、「……したまへ」「……てほしい」の意になる。  
我なば、いかにせよとて、捨て、は昇り給ふぞ。具して率て、おはせぬ。(伴ひたまへ)と、泣きてふせれば。(竹取物語)



はや船出して、この浦を去りぬ。(去つてほし。)と宣はず。(源氏物語)

三五二 ねになく、ねをなく

「音になく」「音をなく」で、「聲を立て、なく」意。

岩が根のこやしき山を、越えかれて、ねにはなく(聲を立て、泣く)とも、色にでめやし。  
(萬葉集)  
春ながら、心もゆかぬ鶯は、花を見ながら、音のみぞなく(聲を立て、鳴くばかりである)。(古今集)

三五三 ねんす

「念す」で、(1)「祈る」「祈願する」意と、

清水の觀世音をねんじ(祈り)奉りても、すべなく、思ひまどふ。(源氏物語)  
起臥憎み給ふを、大將殿の北方、歌き給ひて、……今しばしだにおほせなむと念じ。(新

○こしき 險阻  
△なから

△だに  
△なむ

○心さかしきもの  
氣丈な者。  
○うたてあるさま  
あやしい様子。  
○ありわたる世  
すにありて年月を過

△ながら  
△ほど  
○大手 城の前面。  
○櫓 城門・城壁な  
どにこしらへてあ  
る高樓で、物見と  
か矢玉を發射する  
とかに使はれる。  
△てけり

り)給ふ。(落窪物語)

(2)「堪へ忍ぶ」「こらへる」「がまんする」意とある。

弓矢をとりたてむとすれども、手に力もなくなりて、接え風りたる中に、心さかしきもの、  
ねむじて(がまんして)、射むとすれども、外さまへいきければ。(竹取物語)  
うたてあるさまにもこそあれと、ねんじ(堪へ忍び)つつありわたるに。(大和物語)

三五三 ねんなし

「念なし」で、(1)「残念である」「無念である」「遺憾である」の意、

都にありながら、この歌を出さむこと、念なし(残念である)と思ひて。(古今著聞集)  
行方見失ひぬ、ねんなし(無念だ)とあきれ居たるほどに。(本願抄)

(2)「容易である」「たやすい」の意などにいふ。  
大手の櫓をば、夜葦三日が間に、念なく(たやすく)撫り崩してけり。(太平記)

三五四 のごか・のごやか・のごげし

(東京高麗、千歳傳等、  
陸奥志、其京女高麗)



「のどか」「のどやか」は、「長閑」の字をあて、名詞又は副詞として用ひられ、通常、(1)「空が晴れてうららかなであること」「天氣が穏かであること」にいふが、

○春めきて、春らしくなつて。

風は、いとつよく吹けども、日、のどか(うらやか)にて。(源氏物語)

春めきて、のどやか(うらやか)なる日影に、垣根の草、萌え出づる頃。(徒然草)

又、(2)「もの静かであること」「ゆつたりしてゐること」「のんびりしてゐること」の意に用ひられる。

○とのゝ所 宿直

御とのゝ所も、例よりは、のどやか(もの静か)なる心地するに。(源氏物語)

○法の聲 兼經說

物々のみ思ひの家を出でてこそ、のどかに(のんびりと)法の聲を聞かまし。(和泉式部集)

△すべて

すべて、春は、雨こそどか(落ちついても静か)なれ。(松平定信)

「のどけし」は、形容詞で、(3)「天氣が穏かである」「空がはれてうららかなである」といふ外に、

○欠方の「光」に  
かけたる枕詞。  
○しづ心なく  
せはしく。心

欠方の光のどけき(うらやかである)春の日に、いづ心なく花の散るらむ。(古今集)

(4)「もの静かである」「のんびりしてゐる」「ゆつたりしてゐる」の意にいふ。  
花に似ず、のどけき(のんびりしてゐる)ものは、春がすみ、たなびく野邊の松にぞありける。(貫之集)

空ゆく月日の、限り知らず、のどけく(ゆつたりして)おはしましぬべかりける世を。(増鏡)

三五のしる

「罵る」の字をあて、今日では、(1)「聲高く叱る」「悪しざまにいふ」「口ぎたなくいふ」などの意に用ひられるが、古文では、これとは別に、(2)「やかましくいひ立てる」「騒ぎたてる」「大きな聲でやかましくいふ」の意。